竹の。呂律のそらへ琴の音に。峯の松風かよひくる。あさつをと先の返すおる。五節のはしめ是なれや（上同打上）乙女子か（引）かや〳〵。北から玉のことの音に。ひかれゐあつるをんかくに。（ッヨク）神々も來臨し。（ナヤ）勝手八所此やまに。木守の御前瀧王とは（浮シテ上）「玉をかくすや吉野山（引）（上同）すおはち姿を顯はして。（引）則すかたを顯はし給ひて。天をさす手は（上シテ）「昭瀧（上地）地をまたさすは（シテ）「金剛（同）ほうせきの上に立て一足をひつさけ。東西南北十方世界の虛空に飛行して普天の下卒土のうちに。王位をいかてかかろんせむとたいせいりきのちからを出し國土をあらため治まる御代の。天武の聖代かしこさ惠み。あらたなりけるたえしかな

殺生石

（シテサシ）（ツヨク）「然れは紅色をとして。（同）容顏美麗なりしかは。御門の叡慮あさからす（上シテ）「有時玉藻の前か智惠をはかり給ふに。一事と〳〵こはることおし。（同）經論聖教和漢の才詩歌管弦にいたるまて。問に答へ口の時から（下シテ）「心底くもり絃おれは（同）とて。（同）玉もの前とろ。（引）召をける或時帝は。清涼殿に御出なり。（ナヤ）月卿雲客の堪能なるを召

集め。管絃の御遊有しに。（ナヤ）頃は秋の末。月また樂き宵の空の雲のけしき冷まし〳〵。（ナヤ）打時雨吹風に。御殿の燈消にけり。雲の上人たち騷き。松明とくと進むれ。玉藻の前か身より（ナヤ）光をはなちて。清涼殿を照しけれは（ナヤ）ひかり大内に滿々て畫圖の屏風萩の戸。闇の夜の錦成しかとや。光りにかゝやきてひとへに（上シテ）「帝ろれよりも。（同）御惱とおらせ給ひしかは。（ナヤ）安倍のやす成うらおつて。（ナヤ）勘狀に申やう。（ナヤ）是は偏に玉もの前か所爲なりや。王法を傾けんと。（ナヤ）化生してきたりたり調伏のまつり有へしとや（ナヤ）奏すれは。忽ちに。叡慮もかはり引のへて。玉藻化生をもとの身に。（ナヤ）なす野の草の露と消しおは是あり（ワキ詞）「かさに委く語り給ふ。御身は如何成人やらん（シテ詞）「今は何をかつゝむへき。其古しへは玉ものまへ。今はなす野の殺生石。其石魂にて候也（ワキ）「實や餘りに惡念は。かへつて善心と成へし。然らは衣鉢を授くへし。同くは本躰を。（上かん）二度顯し給ふへし（シテ）「荒恥かしや我姿。ふるは淺間の夕煙の（上歌同）たちかへり夜に成て。〳〵。懺悔のすかたあらはさんと。（ナヤ）夕（トリ）闇の夜の空なれと。此夜は

あかし燈火の。我影おりと思し召。恐れ給はて待給へと石にかくれ失にけりや石にかくれ失にけり

「水石こいろおしとは申せとも。草木國土悉皆成佛と開時は。詞本より佛躰具足せり。況や衣鉢をさつくるならは成佛疑ひあるへからすと。花を手向燒香し。石面にむかつて佛事をなす。汝元來殺生石とふせされい。何をの所より來つて。上今生かくのことし。詞急らにされ〳〵。自今已後。なんちを成佛せしめ。佛躰具如の全身となさむ。上「捧取せよ」「浮シテ上「石に精あり。水にをとあり。上風は大虚にわたる。同かたちを今ろ顯はす石のふたつにわるれは石魂忽ちに。あらはれ出たり恐ろしや「ワキ打上「ふしきやな此石二つにわれ。光のうちをよくみれは野干の像は有なから。さもふしきなる人躰なり。上シテ「今は何をかつゝむへき。天竺にては班足太子の塚の神。大唐にては幽王の后褒似と現し。我朝にては鳥羽院の。玉もの前とはなりたるなり。同我王法をかたふけんと。かりに饒女の形と成。玉躰に近づき奉れは御惱となる。既に御命をとらんと悦をあし〳〵所に。安倍の泰成。調伏のまつりを始め。壇に五色の幣帛をた

て。玉藻に御幣を持せつゝ。上かん肝膽をくたき祈りしかは上同頓て五躰を苦しめて。〳〵幣帛をおつ取とふ空の。雲ゐを翔り海山をこえて此野に隱れすむ上シテ其後勅使たつて。下同〳〵。三浦の介。上總の介同人に倫旨をなされつゝ。奈須野の化生のものを退治せよとの勅をうけて。ト野干は犬に似たれば犬にて稽古有へしとて百日犬をゝ射たりける是犬追物はじめとかや下シテ「同介は狩裝束にて。ヤ〳〵數万騎。奈須野を取こめて。草をわかつて狩けるに。ヤ身を何と那須の原に。顯はれ出し。を狩人の。追つまくつさくりにつけて。矢の下に射ふせられて。即時に命をいたつらに。那須の原の露と消ても猶執心は。此野に殘つて。殺生石と成て。人をとる事多年なれとも今あひかたき。御法をうけて。此後惡事をいたすこと。有へからすと。御僧に。約束かたき石となつて。約束かたき石と成て。鬼神のすかたはうせにけり

船橋

ワキ上歌「ふりにしあとをあらためて。〳〵。三寶加持の行ひに五道の罪も消ぬへき。法の力り有かたき〳〵

ツレかん上「如何に行者有難や。いたつらに三途に沈みし身なれ共。法のちからか舟はしの。うかゝふ身となる有難さよ　浮シテ上「いかに行者我はなほし。此妄執の故により。浮ひ兼たる橋はしらの。重き苦患を見せ申さんなくおみた。雨とふらなん渡り川。水まさりなは。地「歸れや歸れ。あた波の「はしらを戴く盤石の苦患是々見給へ淺ましや　下シテ「見我身者發菩提の。功力を受ていうおらく。奈落の底の。もゝつとおりしも。同知我心者即心成佛。ありかたや　打上「痛はしやいまた邪婬の業深き。其執心をふり捨て。猶々むかしを懺悔し給へ　ツレ同「何事も懺悔に罪の雲消て。眞如の月も出つゝし　上シテ「五障の霞のはれかたき。春のよの一時胡蝶の夢の驚れにいて〳〵姿を見み申さん　上ツレ「としや芳野のやまおろねと。これも妹背の中川の　シテ同「橋のとたゑのありけるとは。いさ白波のよるとに　上ツレ「通ひ馴たる浮船の　シテ「共にこかる。おもひつま。　下シテ霄々に。かよひ馴たるゝふおはしの。下カン　さゑ渡る夜の。月も半に更辭りて　上地「人もねにふしうしみつさむき。河風もいとはし逢瀬の向ひの岸に見ゑたる人かけはろをかをゝろ嬉しやたのもしや　上歌同打上樂ひに夫ろと見〳〵えし中の。橋を隔てゝ立來る波の。より間のはしかかさふきの。行相のまちかく成ゆくまゝに。放せる板間をふみはつしかつはと落て沈みけり　上シテ東路の。をのゝ宇橋。取放し。親しさ　下キリ　くれは。妹にあはぬかも　下キリ　執心の鬼と成て　下同〳〵。共に三途の川橋の。橋柱に立られて。惡龍のけしきにかはり。程おく生死婆婆の妄執。邪婬の惡鬼となつて。我と身を責苦患に沈むを行者の法味。功力により眞如發心の玉はしの眞如發心の玉橋のうかへる身とゝ成にけるゝ〳〵

熊坂

ワキ上歌「一夜ふすをしかのつの〳〵束の間も。〳〵。ねられむ物か秋風の。松のした臥夜もすから。聲佛事をや。おしぬらん〳〵　浮シテ上「東南にかせたつて西北に雲しつかならす。夕闇の。夜風はけしき山陰に　上地「こすゑ木の間や。さはく　引「シテ　引上同「有明頃ろいつしかに　打上月は出ても朧夜なるへし切いを攻よと前後を下知し。弓手や先てに心をくはつて。人のたからをうはひし惡

逆。婆婆の執心これ御覽せよ。淺ましや　「扨は熊坂の長範にてましますか。其時の有樣御物語しへ「偖も三條の吉次信高とて。毎年數多の寶を集て。高荷を作つてをくへ下る。天晴是をとらはやと。思ふ與力の人數は誰ころ　「偖國々より集りし。中に取ても江州には　「近江は國には河内のかくせう。摺針太郎兄弟は。日本一の剛の者。おもてうちには並ひなし「扨又都の其中に。多きなかにもたか有しろ三衛の衛門壬生の小猿　「火ともしの上手わけきりには　「是等にうへはよもこさし　「偖北國には越前の　「阿取波の松若三國の九郎　「加賀の國には熊坂の　「此　長範を始めとして。究竟の手柄の之を者ら。七十人は與力して　「吉次か通るみちすから野にも山にも宿泊に。目付をつけて是を見す　「此赤坂の宿に着。爰ころ究竟の所なれ。引場も四方に道多し。みれは雪より遊君すへ。數百の遊ひ時をうつす夜も更行は吉次兄弟。前後も知す臥たりしに　「十六七の小男の。目のうち人に勝れたるか。障子の隙間ものあひの。ろよともするをこゝろにかけて　「少しもふさて有けるを　「牛若殿とは夢にも知らす

運のつきぬる盜人等　「きけんは能ろ　「はや　「いれと　「いふところ程も久しけれ。〳〵皆我さきにと松明を。投とみ〳〵乱れ入。勢ひはやうやく神も。おもてをむくへきやうなきや。然れとも牛若子すてし。恐るゝ氣色なく。小太刀をぬひてはたりあひ。しゝふしん虎乱入。飛鳥のかけ足の手をくたき。責戰へはとらえす。表にすゝむ十三人。同しまくらに切伏られ其外手負太刀をすて具足をうはゝれはうゝ逃て。命はかりをのかるもあり。熊さかいふ樣。此者ともを手のしたに。打は如何さま鬼神か人間にてはよもあら。長刀杖にたきうしろねたくも引るか　「熊坂て。長刀杖にたきうしろねたくも引るか　「熊坂思ふやう。同〳〵もの〳〵し其冠者か。切といふと。もさろあるらんくまさか秘術を振ふならは如何成天魔鬼神なり共。中に抓て微塵になし。討れたる者其の。いけうやうにはうせんとて。道より取て返し例の長刀引ろはめ。折戸を小楯にとつて。彼小男をねらひけ足。牛若子は御覽して太刀抜ろはめ物間

を。少し隔て待給ふや。熊坂も長刀かまへ。樂にかゝるをまちけるか。いらつて熊坂左足をふみ鉄壁も通れと突長刀を。はつしとうつて弓手へとせは。退駈すかさすこひ長刀に。ひらりとのれは。はゝきにおし。しさつて引はゑて〳〵とすを。退取直して丁ときをは。中にて結ふをはとく手に。かへつて拂へは飛あかつて其儘見みすかたちも失て。爰やかしを尋る所に思ひもよらぬうしろよと。具足の透間をちようときれは。とはいかにあの冠者にきらるゝ事の腹立さよと。いへとも天命の。運のきはめう無念なる。打物わさにてかゝふまし〳〵。手取にせんとて長刀なけ捨大手をひろけて〳〵の眠廓。かしこのつまりに退駈おつゝめとらんとすれとも蜻蛉いな妻水の月かやすかたは見れとも手にとられす。次第〳〵に重手はおひぬ〳〵。猛きこゝろちからもよわり。弱り行て。此松か根の苔の露霜と。消しむかしの物かたり。末の世助けたひ給へと。夕つけも告渡る。夜もしらしらと赤坂の松陰にかくれけり松かけにころは隱れけを

夜鳥

「有驗の高僧貴僧に仰て。大法を修せられけれとも其しるし更にあかりけり。御惱はうしの刻はかりにて有けるか。東三條の杜の方より黑雲一村立來つて御殿の上におはへはかならずおひ伏給ひけり。「則公卿せんきあつて。定め變化のものなるへし。武士に仰て警固有へしとて。源平兩家の兵を撰せられける程に。頼政を撰み出された。頼政其時は。兵庫の介とう申ける。たのみたる郎等には猪早太只一人召具した。我身は二重の狩衣に山鳥の尾にてはいたりける。とかり矢二筋しけとうの弓に取ろへて。御殿の大ゆかにしてうして。御惱の刻限を今や〳〵と待居たり。さる程に案のことく黑雲一村立來り。御殿の上に覆ひたり。頼政きつと見上れは。雲中に怪しき物は姿あり。「矢とつて打たかひ。南無八幡大菩薩と。心中に祈念して。よつひきひやうと放つ矢に手てたへしてはたと中る。得たりやおうと矢さけひして。落るところを猪早太つゝとよりてゝけさまに。とゝの刀ろさいたりける。扨火をともし能みれは。かしらは猿尾はくちなは。足手はとうのとと

くにて。鳴聲鵜に似たりけり。恐ろしなんともおろかなるなたちおりけり　上ロンキ地　寶かくれなき世語りの。其一念をひるかへし浮ふちゐらと成給へ　上シテ　「浮むへき便り渚の淺みとり。水のかしはにあらは社沉むはうかふ緣おらえ　上地　「寶や他生の緣ろとて　シテ　「時も社あきこよひしも　地　なき世の人にあひ竹の　シテ　「掉とりおほしうつほふね　地　「乘とみにしか　シテ　「よるの浪に　下同　浮ぬ沉み　下　ぬみみつのくを絶々の。いくへにきくは鵜の聲。おろろしや冷しや荒おろろしやすさましや　上歌　「御法の聲も浦波も。かゝ。皆實相の道ひろさ。法を受よと夜と共に。此御經を讀誦する〳〵　上ワキ　「一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛　浮シテ　上　「有情非情。皆告成佛道　下ワキ　「たのむへし　下シテ　「頼むへしや　上地　打上五十二類も我同性の。涅槃にひかれて眞如の月のよしほに浮ひつゝ是迄來れり。有難や　上ワキ　打上　ふしきやな目前に來る物をみれは。面は猿足手はとら。聞しに替らぬ變化の姿。荒恐ろしの有樣やな　上シテ　「扨も我。惡心外道の變化と成て。佛法王法の障とあらんと。王城近く遍滿して。同　東三條の麓に暫く飛行して。上　うしみつ斗のよなくに。御殿の上に飛さかれは　上同　即御惱しきりにて。かゝ玉躰を惱まして。おひねたまいらせたまふ事も我なすわさよと怒りをおしゝに思ひもよらさりし頼政か。矢先に中れは變身うせて落々らいらゝと地に倒れて。たちまちに滅せし事。思へは頼政か箭先よりは君の天罰をあたりけるよと今こそ思ひしられたれ。其後主上御感あつて獅子王と云御劔を頼政に下されけるをうちの大臣給りて。階をおり給ふに折ふし郭公ねとつれけれは。大臣とりあへす　上シテ　「ほとゝきす。名をも雲ゐに。あくる哉と。仰られけれは。同　よりまさ。右のひさをついて左の袖をひろけ月を少し目に懸て。弓張月の。いるにまかせてとなつかまつり御劔を給はり。御前を罷歸るは。頼まさは名を舉て我は。名をなかすうつほ舟に。おしいれられて淀川のよとみつおかれつ行末の。うとのも同し蘆の屋の。浦廻のうき洲に流れとまつて。朽あから。空穗舟の。月日も見みす。晴きよりゝ。くらき道にう入にける。はるかにてらせ山の端のはるかに照せ。山のはの月と共に。海月も入に

けり海月と共にいりにけり

照君

「然れは胡國の軍剛うして。したかふ事期しかたし。されは樂ひに和睦して。其しるしひとつなからんやと。美人を一人つかはすへき御約束の有しに。ろも漢王の宣旨には。三千人の寵愛。いつれを分るかたもなしもろ〳〵の宮女の。行跡高位の姿を賢聖の障子に似せ繪に是を顯はし。中におとれる樣あらは。則かれをねらひて。胡王の爲につかはし。天下の運を靜めむと。綸言ならせ給へは。數々の宮女たち。是をいかにとかなしひ。給かける人を語らひ皆まひあひを餞りつ〳〵。御約束の有しゆへ。「されはうつせる其姿。いつれを見るも妙にして。柳髪風にたをやかに桃顏露を含むて色猶ふかき姿也。中にも照君はならふかたなき美人にて帝のおほねたりしなり。ろれをたの免る故やらんたゝうちとけて有しに。畫圖に移せる面影の。餘りいやしくみみしかはもさころは寵愛。はなはたしくと申せとも。君子に私の。と樂なしとや思しけん。ちからなくして照君を胡國の民に

つかはさる「むかし桃葉といひし人。仙女とちきりをこめ淺からさりしに。仙女空しく成て後。桃の花を鏡にうつせは。さなから仙女の姿見みけるとおもふ。此柳もさなから照君の姿あり。いささせ給へ鏡にうつして影を見む「ろれは仙女のすかたなり。いかて是にはたとふへき「いや夫のみあらす鏡あは戀しき人の移るなり「夢のすかたをうつしゝは「しんやうか持します鏡「舊卿を鏡にうつしゝは「とけつといつし旅人也「夫はむかしあとしをへて「花の鏡となる水は「散かゝる花や曇らん思ひはいとゝます鏡もしも姿を見るやとあむとんに向つて。なきゐたまふ。「是は胡國に迁さるし。王照君か亡魂あり。偖も父母別れを歎き。春の柳の木のもとに。泣しつみ給ふ痛はしさよ。急き鏡に影を移し。父母に姿をみみ申さん。春の夜の朧月夜に身をなして「くもりなからも。影見みん「打上おろろしや鬼とやいはん面影の。身の毛もよたつはかりなり。いかなる人にてましませは。かゝみにはうつまたまふらん「是は胡國のねひすの大將。韓耶將か。幽靈あり「胡國の夷は人

間あり。今見る姿は人ならす。目にもみねとも音にきく。冥途のをにかふろろしや　下シテ「韓耶將も空しく成同しく照君か父母に。對面の爲に來りたり　ツレ「よしなかりける對面かな。姿を見るも怖しや　シテ詞「そもおそるへき謂はいかに　ツレ「こゝろにしらぬ我すかた。鏡に寄て見給へとよ　下シテ「いて〱。詞 鏡に影をうつし。まとに 詞 氣疎姿かと。鏡に寄添影をみれは。上かん 怖れ給ふも荒道理や　上同 簪をいたゝく髮すちは　引 ハタラキ 打上簪をいたゝく髮筋は　上シテ「主をはなれて空にたち　上地「元結さらにたまらねは　上シテ「さねかつらにて結ひさけ　上地「耳にはくさりをさけたれは。鬼神と見給ふ姿もはつかしかゝ見によりろひ立ても居ても。鬼とは見れとも人とは見みす。其身かならぬか我なから。おろろしかりける顔つきかな面目なしとて立歸る　キリ　下同「たゝ照君のまゆすみは。〱。やなきの色にことならす。罪をあらはすしようはりは。それもかくれはよもあらし。花かと見みてくもる日は。うはの空なる物なもな。かけもほのかに三日月の。曇らぬ人のこゝろころ。まことをうつすかゝみなき〱

阿漕

ワキ上歌　ウタフ「いさ弔らん數々の。法の中にも一乘の妙なる花の紐ときて。苔の衣の玉ならは。終に光りは暗からし〱　下ワキ「あまのかる。藻にすむ虫の我からと。音を社なかめ。世をはいとはし。とよひはすてし波あれて。御膳の熱の網はまた　ひかれぬよなふ。詞 よき障なりと夕月なれは。宵より聽て入汐の。みちをかへ人死を。忍ひ〱に引網の。沖にも磯にも船は見みす　地 上唯我れみろなこのうみなこきか塩木とりもせて猶執心の。網をかむ　引上シテ「伊勢のうみ清き渚のたま〱も　地「とうころ便り法の聲　シテ「耳には聞とも。猶心には　引上同 唯罪をのみもち網の。浪はかへつて。猛火となるろや。あらおつや。たへかたや打上うじみつすくるよるの夢。〱。見よや因果のめくり來る火車に業つむ數。苦しめて目の前に地獄も誠也實。おろろしのけしきや　下シテ「思ふもうらめしいにしへの　同〱しやはの名を得し。阿漕か此浦に猶執心のこゝろ引網の手馴しうろくつ今はかへつて上悪魚毒蛇と成て。紅蓮大紅蓮の氷に身をいため骨

をくたけはさけふ息は。焦熱大焦熱の。焔けふり雲霧上立ゐに障もおき。冥途のせめも度重おる。阿鼻か浦の罪とかを助け給へや旅人よたすけ給へや旅人とて。又浪に入にけりまた浪の底にいりにけり

藤戸

ワキ上歌「様々に吊ふ法の聲立て。〳〵。涙に浮寢のよるとなく蛙とも分ぬ吊ひの。般若の舟のおのつから。北ともつゐをとく法の。こゝろを靜め聲を上引下ワキ一切有情。殺害三界不墮惡趣浮シテ上「うしや思ひ出し忘んと思ふ心ころ。忘れぬよりは思ひなれ。去にても身は仇浪の定めおく共。科によるへの水にころ。濁る心の罪もわらは。重き罪科も有へきに。よそなかりける。海路のしるへ。思へは三途の。せふみおそふしきやなはや明方の水上より。化したる者の見みたるは彼妄者もや見ゆらんと寄異の思ををおしけれは

シテ詞「御吊ひは有難けれ共。恨は盡ぬ妄執を。申さん爲に來りたり

ワキかん「何と怨を夕月の。其夜に歸る浦浪の中シテ「藤戸のわたりをしへよとの。仰もおもき岩浪の

ワキ「川瀬の樣なる淺みの通りを。敎し儘に渡りしかは

弓箭の御名をあくるのみか「昔より今にいたるまて馬にて海をわたす事「希代の樣なをはとて「此鳴を御恩に給はる程の「御よろこひも我故おれは「いか成恩をも「たふへきに上同思ひの外に一命を。召れし事は馬にて海をわたすよりも。これ希代のたゑしなる。去にても忘かたや。われなるうき洲の岩のうへにわれをつれて行水のこほりのとくなるかたゐを扳て。胸のあたりをぎし通し。さしとをさるれはきも魂もあきにく〳〵となる處を。其儘海におし入られて。千尋の底にしつみしに「下シテ「折ふしひく盤に。下同引れて行浪の浮ぬ沉みぬ埋れ木の岩の裕に流れかゝつて藤戸の水底の。惡龍の水片地神となつて恨をなさんと思ひしに。思はさるに御吊ひの。御法の御船に法を得て。即弘誓の舟に浮へはみおれ掉。さし引てゆく程に生死の海をわたりて願ひのことくにやす〳〵と彼岸にいたり〳〵てかのきしに至り〳〵て成佛得脫の身となりぬ成佛の身とろおりにける

善知鳥

「迎も渡世をいとなまは士農工商の家にも生れず。同
又は琴碁書畫をたしなむ身共ならず　上「たゝ明ても
暮ても殺生をいとなみ。同遊々たる春の日も所作たらぬ
は時をうしなふ。秋の夜なかし夜長けれとも。中いさり
火しろうして眠ることなし　下「九夏の天も暑を忘れ
同
玄冬のあしたも寒からす　鹿を逐獵師は山を見
すといふ事あり。身の苦しさもかなしさも。忘れ草の
追鳥たか網をさしひく蝑の末　の松山風あれて
袖にあみこす沖のいし。又はひかたとて。うみこ
し成しさと迄も。千賀の蝑かまみをこかす。報ひを
もわすれけることわさをおし〳〵悔しさよ。抑うとふ安
かたのとり〳〵に。品かはりたる殺生の　上「中に無
慈やなこの鳥の。同愚かなるかあつくはねは。木々の
こすゑにも羽を敷おみのうきすをも憑よかし。平砂
に子をうみて落鷹の。はかなや親はかくすとすれ
と善知鳥と喚れて。子はやすかたと答へけりさてう
とられやすかた　上「うと　ふ　打上親は空にて血の涙
を。〳〵。ふらせはぬれしとすかみのや。笠をかた
ふけ袞かしこの。たよりを求めてかくれ笠。隱れ

みのにもわらさきは。猶ふりかゝる血の涙に。め
もくれおねにうみかたるはもみちのはしの。かさゝ
きか　上同　婆婆にては善知鳥やすかたと見みしも。〳〵
冥途にしては。化鳥となり罪人を追。立黑かねの。は
しをおらし羽をたゝき。あかゝねの爪をとき立ては
まなこを掘んてしゝむらを叫むとすれとも猛火の煙
に。咽んて聲を。上ねはかし鳥を殺しゝ科やらん
逃んとすれと。立得ぬは羽拔鳥の報ひか　下「うとふ
はかへにて鷹と成。同我は雛子とり成たりける。遁れ
かたの〳〵狩場れ雪吹に空もおろし地を走る犬鷹
に責られて。荒こゝろうとふやすかた。安き障なき
身の苦しひを。たすけてたへや　御僧たすけてたへや
御僧といふかと思へは失にけり

融

ワキ上「いろ枕苔の衣をかた敷て。〳〵。岩根の床に
夜終。なをも寄とくをみるへしと。夢まち貞の旅寢
かな〳〵　呼上「忘て年を經し物を。又いにしへに
歸る浪の。みつ鹽竈のうらにして。こよひの月を陸奥
の。ちかの浦半も遠き世に。其名を殘すまちきみ。

とはるのかとゝとは我事也。われ盃かまとゝろをよせ。あのまかきか嶋の松陰に。名月に舟をうかへ。月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月のいろ。ちえふるや。雪を廻らす雲の袖（上地）「さすやこのつらのゐたゝに」「光りを花と。散ず粧ひ（地）「爰にも名にたつ白河の浪のあら面白や曲水のをかつき。ろ（上ロンキ地マイ打上ウ）荒おもをろの遊樂や。ろも明月の其中に。また初月の雫々に。影も姿も少なきはいか成謂なるらん（上シテ）「うれは西岫に。入日のいまたちかけれは。其影に隠さるゝ。たとへは月のある夜は星の薄きか如く也（上地）「青陽の春の始めには（下シテ）「霞むゆふへの遠山（上地）「黛のいろに三日月の（下シテ）「影を舟にも譬へたり（上地）「又水中の遊魚は（下シテ）「釣針と疑ひ（上地）「雲上の飛鳥は（下シテ）「弓の影共驚く（上地）「一輪も降らす（下シテ）「萬水もものはらす（上地）「鳥は池邊の樹に宿し（下シテ）「魚は。月下の波に臥（地）「聞とも あかしあきの夜の（下シテ）「鳥も鳴（地）「鐘も聞ねて（下シテ）「月もはや（上同）「影かたふきて明かたの雲と成雨とおる。此光陰に誘れて。月の都に入給ふ粧ひ荒名殘をしの面影や名殘をしの面影

當摩

（シテサシ）「ろの御息女中將姫。此山にこもり給ひたゝ。（同ツヨロ）稱讃淨土經。毎日讀誦し給ひしか。心中に誓ひ給ふやう。ねかはくは正身のみた來迎有て。我に拜まれおはしませと。一心不乱に觀念し給ふ（下シテ）「しからすは畢命をせと。一心不乱に觀念し給ふ（下クセ）「所は山陰の。松吹風も凉しくてさ定にいり給ふ（引）「なから夏を忘れ水の。音も絶々に心耳を澄す夜終。稱名觀念のゆかの上。座禪圓月の窓のうち寥々とある折節に。一人の老尼の。忽然と來りたゝすめり。是は如何成人やらんと。尋ねさせ給ひしに。老尼答へて宣はく。誰とはおとや愚なり。よへはころ來りたれと。仰せられける程に。中將姫はおきれつゝ（上シテ）「われは誰をかよふこ鳥。同たつきもしらぬ山中に。聲たつる非迎ぞ。南無あみた佛の唱へおらて又他事もなき物をとや。苔させ給ひしに。夫ころ我名なれ聲をしるへに來れりと。宣へは姫君も扨は此願成就して。正身の彌陀如來。實來迎の時節よと感涙肝にめいしつゝ綺羅衣の御袖も。しほる斗

に見み給ふ　上ロンキ地　宵や貴き物語り。即みたの教へ
ろと思ふにつけて有難や　上シテ　ことよひしも二月中の
五日にて。然も時正の時節あり。法事をなさん爲今此
寺に來りたり　上地　「法事の爲にきたるとは。うもやいか成
御事ろ　シテ　「今は何をかつゝむへき。其古しへの化尼化
女の　地　「夢中に現し來れりと　シテ　「いひもあへねは　同　「ひかり
さして。花ふり異香薫し。音　ヤチ　樂の聲すなり。　ヤア　「恥かし
や旅人よ暇申て歸る山の。　ヤチ　「上　の嶽とはふた上の
山と社人はいへとまことは此尼かのはりし山なる
故に。尼　上　の嵩とは申おり老のさかをのぼり。上
る雲に乘てあかりけり紫雲に乘てあかりけり　ツキ同　「かく
有難き御事あれは。重ねて奇特をかかまんと　上欣　いひも
あへねはふしきやな。〳〵。妙音きこえ光りをさ。
ふの菩薩のまのあたり。顯れ給ふふしきさよ〳〵
浮シテ上　「唯今夢中に顯れたるは。中將姫の精魂なり。我
娑婆に有ま時。稱讃淨土經。　上　朝々時々に怠たらす。信
心まことに成し故に。微明安樂の潔界の衆となり。本覺
眞如の圓闕に座せり。しかれとも。爰をさる事遠か
らすして。法身却來の法味をなせり　上地　「あり難や。蕭蹠

空界の莊嚴は。眼わ雲路にかゝやき　シテ　「轉妙法輪の音聲
は。聽寶刹の耳にみてり　地　蕭然とある。曉のとゝろ
誡に涼しき。　引　みちにひかる〳〵光陰のとゝろ　打上　れしむへ
しやな〳〵。時はひとをもまたさる物を。即爰う。唯心
の淨土經いたゝきまつれや〳〵。接取不捨　シテ　「爲一
切世間。說此難信　上地　「之法。是爲。甚難　打上　「寶も此
法はなはたしけれは　地　「信する事もかたかるへしとや
シテ　「唯たのめ　地　「願めやたの免　上シテ　「慈悲加祐　地　「令心不
亂に　シテ　「みたるゝよ　地　「見たるなよ　シテ　「十聲も　地　「一こゑろ
あ　同　「り　ツレ　「かたやマイ　打上　下シテ　「浮夜の鐘の音。　同　「ふせうの
ひ　ツレ　「き。稱名の妙音の見佛聞法いろ〳〵の法事。　上
寶もあまねき光明遍照十　ツレ　「方の衆生をた〳〵西方に。
むかへゆく。御のりの船のみをれ掉。御法の舟のさ
はをくるまのゆめの。夜はほの〳〵とろ成にける

須摩源氏

ツレ　「ちと〳〵しく虫の音しけきあをちふの。　同　露けき宿に
明くらさ。小萩かもとのさひしさまて。はとくみ給
ひし御惠　引　「中クセ　みもかしうき勅をうけ十二にて
うひ冠。高麗國の相人の告たりし始めよりひかる源

氏と名をよばる。箒　水の巻を始め紅葉の賀の
まきに正三位に叙せらる。花の宴の春のころ。行衛も
しらで入月の。おぼろけならぬ契りゆへ。年二十五と
申せしに。津の國須磨のうら海士人か歎きを身につみ
て。つきの春　播磨の明石のうらにたひ。とはす語
の夢をさへうつゝに語る人もなし。去程に天下に奇
持の告有しかは。又みやこに召歸され。數の外の官を
經て「其後打つゝき。身をつくしに内大臣をと女の
まきに。大政大臣藤の裏葉に。太上天皇かくたのし
みを極て光る君とは申なり　扨や源氏のきうせ
きの。分ていつくの程やらんくわしく敬へ給へや
いつく共いさしら波の爰許は。皆其あと〳〵ゆふ暮の
月の夜をまち給ふへしもしや奇持を御覽せん「ろも
や奇持を見んろとは。何をか待ん月かけの「光源氏の
御住家。むかしは須摩「今は朝卒の天に住たまへ
は月宮の　にて降り此海に影向有へし。の樣に
申翁も。其品々の物語。源氏の巻の名なれや
雲かくれしてろ失にける雲かくれして失にけり

「扨は源氏の太將假に顯はれ。我にとと薬をかはし給ふ

か。いさや今霄は爰に居て。猶も奇特を拜まんと　須
摩のうら野山の月に旅寢して。〳〵。こゝろを澄す磯
枕。浪にたゝへて音樂の。さこゆる聲ろ有難き
〳〵。「浮シテ上「荒面白の海原やな我いにしへは光源氏と
いはれ。今は朝卒にかへり。天上の住居なれとも月に
泳して圖浮にくたり。所も須摩の浦なれは。青海波
の遊樂に。ひかれて月の夜しほの波。のへすなる。波
の花ちる白衣の袖「玉の笛の音聲澄て「寫笛琴笠篌。
孤雲のひゝき打上天もうつるや　須摩の浦の。青海の
波風。しん〳〵たり雲となりあめとなり。夢う
つゝともわかさるに。天より光さす。御影の中にあら
たなる。童男來り給ふろや。扨は名にしおふ光ろ　源
氏にて有や覽　「ろの名も余所に白浪のこゝもとは
我住家。猶も他生を助けんと朝卒天より。二度爰
にあまへたる「荒有かたの御事や。所は須摩のうらな
れ。「四方の嵐も吹落て「遊雲かゝる「春の空
ほんしやくしわうのにんてむに。くたり給ふか
とおぼゆたりや。所　からやまかつへきらといはれ
し。葉　色のきらなるに。青純のかりきぬをたをや

かに召をて。須摩のあらしにひるかへし。たもとも青き海の波。颯々の鈴も驛路の。夜は山よりや明ねらむ〳〵

紘上

上シテ「今は何をかつゝむへき。我紘上のぬしたりし。村上の天皇梨壺の女御夫婦あり上同「御身の入唐と〜めんため。夢中にまみ須摩のうら。こいんのむかしの夢のつけ。思ひ出よ人〳〵とて書けす樣に夫にけり〳〵浮シテ上「抑是は。延喜聖代の御讓り。村上の天皇とは我事なり引上ツレ「其聖代の御宇かとよもろこしより三面のひはを渡さるゝシテ「玄上青山しゝ丸是あり ツレ「青山は仁和寺お室の御讓として。守慶法親王の御相傳シテ「し〜丸は竜宮にと〜まり下界に有 ツレ「玄上青山かくのことく。又つたへきゝ琵琶の音の。しゝ丸左社と床しきろや シテ「いて取出しひかせむと。漫々とある海上に向ひ同いかに下界の龍神慥にきけ。獅々まる持參。つかまつれ引キリ同打上しゝ丸うかふと見みしかは引〳〵。八大竜女を引ぞれ〳〵彼御琵琶を。授け給へは師長給はりひきならし。八大龍王も紘管の役々或は波のつゝ

みをうては。或は琵琶のなにしおふ。しゝとらてんに村上天皇もかあて給ふ面しろかりける。秘曲かな下シテ打上しゝには文珠やめさるらん。下同〳〵。上御門は飛行のくるまに乘し八大竜女にひかれ給へは師長も飛馬に。鞭をあけて。馬上に琵琶を携えて。馬上に琵琶をたつさへて。須摩の歸らくりありかたき

海人

下シテ「扨は疑ふ所あし。同いさ吊らはむ此寺の。こゝろさしある手向草。花の蓮の妙經。色々の善をあし給ふ〳〵上地「寂寞無人聲引浮シテ上「あら有かたの御吊ひやな。この御經にひかれて。五逆の達多は天王記別を蒙り。八歳の竜女は南方無垢世界に生を受る。猶〳〵轉讀し給ふへし上地「深遠罪福相。遍照拾十方引上「微妙淨法身具相。三十二打上地以八十種好シテ「用莊嚴法身地「天人所戴仰。龍神咸恭敬あら有かたの御經やなシテ打上「今此經の德用にて。同〳〵。天竜八部人與非人。皆遙見彼。龍女成佛扨こう讃州志渡寺とかうし。毎年八講朝暮の勤行佛法繁昌の靈地と成も此孝養と。うけたまはる

猩々

ワキ上歌「潯陽の江のほとりにて。〳〵。菊をたゝねて夜ゐすがら。月れまへにも友まつや。又かたふくる盃の。影をたゝへて待居たり〳〵。上地打上老せぬや。〳〵。藥の名をも菊の水。盃もうかひ出て友にあふろ嬉しきこの友に逢うれしき上シテ「みきとき引同〳〵。名もことはりや秋風の上シテ「ふけとも〳〵上地「更に身にはさむからし下シテ「ことはりや白菊の下地「理りやしらきくの。上シテきせ。わたを温めて酒をいさや酌ふよ。上シテ「まれ人も御覽すらん上地「月星は隈もなし上シテ所は潯陽の上地「江の中のさか盛下シテ「猩々舞をまはふよ上地「芦の葉の笛をふき。浪の皷をうちうち上シテ「聲すみ渡るら上地「風の上地「秋のしらへや。殘るらん引「下シテ有難や御身とゝろすなはなるにより。此壺に泉をたゝね。たゝ今かへし。引「あたふるあり。かん「よもつきし下同よもつきし。よろつ代までの竹の葉の酒。くめともつきすゝ。呑ともかはらぬ秋の夜のさかつき。かけもかたふく入江に枯たつ足もとはよろ〳〵と。弱り臥たるまくらのゆめの。覺ると思へはいつみとろのまゝ盡せぬ宿ころ。めてたけれ

白髭

迦葉世尊西天に出世したまふ時。下同大座釋尊うのしゆきをねて。朝卒天に住し給ひしか上シテ「我八相成道の後。ゆいけう流布の地いつれの所にか有へきとて同此なんせひふしうを普く飛行して御覽しけるに。まんくとある大海の上に。一切衆生悉有佛性如來。常住無有變易の波のこゑ。一葉のあしにこりかたまつて。ひとつの嶋と成。今の大宮權現の。はしとのなり引クセ其後人壽。百片地歳の時。悉達と生れ給ひて。八十年の春の頃。頭北面西大脇臥拔提の浪とさゝねたまふさきとも佛は。常住ふめつ法界の。妙躰片地なれはむかし。芦の葉の嶋と成し中津國を御覽するに時はうかやふきあはせずの尊の御代なれは佛法の名字を人しらす。爰に比叡山のふもとさゝなみやゝ志賀のうらのはとりに。釣をたるゝ老翁あり。釋尊かをにむかつて。おきなもしや此地の主たらは此山を我にあたへよ。佛法結界の。地となすへしとのたまへは。おきなこたへて申やう。我人壽六千歳の初より此山の主として。此水海の七度まて。芦原に成

しをも。まさに見たりし翁なりけたゝし此地。けつゐいとなるならは。釣する所告ぬへしと深くをしみ申せは。釋尊ちからなくけん今は寂光土に歸らんとし給へは上シテ「時に東方より。同しやうるり世界のあるし藥師。忽然と出給ひてよきかなやゝ釋尊この地に佛法をひろめ。給はん事よ我人壽二万歳の昔より。此所の主たれと。老翁いまた我をしらすなんぢ此山を惜み申すへきはや開闢し給へ。我も此山の王とあつて。とむに後五百成の。佛法を守るへしとかんたくせい約し給ひて。二佛東西にさり給ふ。其時の翁も。今は白髭の神とかや「ツキ詞「ふしきなりとよか程まて。妙なる神秘を語る翁の。其名はいかにれはつかな「今は何をかつゝひへき。其いにしへも釣をたれし翁なるか。勅使を慰め申さんとて只今爰に來りたり。殊更今宵は天燈龍燈。神前に來現の時節なれは上かん暫く待せ給ふへしと上同「ゆふ部の雲も立さはきくゝ。汀に落くる風の音老の浪もよりくる釣の翁と見へつるか。我白髭の神ろとて玉の。とひらを押ひらき社壇に入せ給ひけりくく上地「八乙女の。

返す袂の色々に。きねかつゝみも壁すみて。神をひわたれる折からかあ「浮レテ上「神は人れうやまふによつて威をます。まさてや是は勅の使。あふきても猶餘り有上歌同太コ打上ふしきや社壇のうちよりも。か〳〵。献に妙なる御壁を出し。とひらもおのつから。あけの玉垣かゝやき渡る。しら髭の。神のみすかた。顯はれたり打上荒有かたの御事や。かゝる奇特に逢事も。唯是きみのみかけそと。感涙袖をうるほせり「シテ謂「いさ〳〵さらはよもすから。舞樂の曲を奏しつゝ。上勅使を慰め申さんと上歌同神樂催馬樂取々に。か〳〵。ヤいと竹の役々秘玉を下シテつくし。柏子をろろへて夜遊の舞樂は有かたや太コ打上「面白やこの舞樂同〳〵の。ヤ皷はおのつから。ヤいろうつ浪の壁ヤ松風はきんをしらへ。心耳をすます折のら上に。天津みろらの雲のかゝやき渡り。湖水のおもて上同鳴動するは天燈竜燈の來現かや太コ打上天地の雨燈あらはれて。引か〳〵神前にろなふる御燈の光り。山河草木かゝやきわたり日夜のせうをつみへさりけり下シテ打上かくて夜もはや明方の。上同かくて夜もはやあけかたになれは。をの〳〵明神に御いとま申。歸れは明神も御

壁を上て。せんさい〳〵と感し給へは天女は天路に又立かへれは龍神は湖水の。上にかけつて。涙をかへす雲をうかちて天地にわかれて飛さりゆけは。あけゆく空も白髭の。明行ろらも白髭の神風。治る御代とろ成にける

寢覺

ツロ「然るに彼みかへりの老翁は。生所も知らす出所も同なくく只おのつから忽然と。顯れ出て寢覺の床に。千年を送る其内に。齋命めてたき藥を服し。三度わかやく故により三かへりの翁と。引名付たり。ウ有時翁申樣。けいやうしやさゆつをつたへてろの名を雲の上にあけ。されは愛染明王は。定の弓ゑの矢にて惡魔をしたかへ給ふ也。我は又御藥の。威德をもつて大君の。代を治めんと思ふと。勅使に申上けれは。勅使喜悅の色殘おし汝いかにと宣へは。上シテ「今は何をかつゝむへき。同我此所に年經たる。三かへりの翁なるか目前に來りたり。之勅使暫く待給へ。夕月の夜もすから。舞樂を奏し見せ申。又御藥をあたへんと。いふかとみれは老翁は。岩陰ゑ寄とみゝて行衛しらす

成にけり行衛もしらず成にけり（上地打上）天津風。

〳〵。雲の通ひ路ふきとちよ乙女の衣色〳〵にいとたけも音を添てや。波の鼓聲すむや。かいせいらくを奏しけり（浮シテ打上）抑是は。いわう佛の化現。無病息災の方便のたゞ。三かへりの翁。假にあらはれ出たる也（上地打上）ろの時老翁とほろをひらき。〳〵。せいてん遙に見渡しけれは「東南に雲はれ（同）「西北の風も吹おこ」をまつて。花降異香音樂の響。舞樂の數〻をとめの袂返すかへすも。面しろや（上地打上）夜遊の舞樂も時過て〳〵。有明かたの月も落くる折から。ふしきや河波はけしくあれて（上同打上）龍王は河波に浮ひ。〳〵。彼沒藥をさゝくる氣色（打上）に座して。ろ見へたりける（上シテ打上）老翁悦ひの思ひをなして。老翁悦ひのおもをおして。彼まを人の沒おくさみに。神通自在の飛術をあらはし夜遊の戯れ。おし給ふ（下シテ打上）かくて時うつり比されわ。（下同）〳〵。かのみくすりを君に捧け勅使にあたへて時迄おとと。水曾のかけとしゆらりと打渡り。歸れ玉へは竜神も東西に飛行のかけりなみにたはふれいはほに上れは夜もさら〳〵と明かたの空の。夜もさら〳〵と明方のろらの夢のねさめは覺にけり

大社

（シテナシ）「然るに五人の王子おはします。（同）第一はあしかの大明神と顯はれ給ふ。山王權現是なり（下シテ）「第二には湊れは（同）大明神。九州宗像の明神と顯れ給ふ。第三はいおさの（引）はや玉の神。常陸鹿嶋の明神とかや（引）第四には（下）とやの大明神。信濃の諏訪の明神と。則現しおはします。第五には。出雲路の大明神。伊豫の三嶋の明神と。あらはを給ふゆちかひ。實曇りなき長月や。（同）月のみろかにとりわきて（上シテ）住よし一所は影向なる。（同）殘りの神々は。十月一日の寅の時に悉く影向なり。（上シテ）樣々色〻の神遊ひ。今も絶せぬ此宮居。かたるもおかしく愚なる（上ロンキ地）誓ひ成へし實有難き物語末世おかしらも隔てなき神の威德ろあらたなる「中〳〵なれや年〻に。けふの今宵の神遊ひ（上地）「其役々も「數〳〵に（上同）あらふる神蓮の舞歌の袖。ひくやみしめのおはたれと。さらゆふかゝる玉垣に立よると見へつるか。神の告ろと云捨て。社壇に入にけり社壇のうち

に入にけり。上地「時雨る空は雲晴て。月も輝く玉の御殿に光りをうふる。けしきかな　天女上「我は是。出雲の浜崎に跡をたれ。佛法王法を守りの神。本地十羅刹女の。化現なり　打上容顔美麗の女躰の神。〳〵。光りもかゝやく。玉の笄。かさしも。匂ふ。袂をかへす夜遊の舞樂はおもしろや　打上實たくひあき舞の袖。〳〵。なひくや雲のたへまより。諸神は殘らず顯れ給ひ。舞樂を奏し。神前に飛行しはやとく姿を顯はし給へとゆふへの月も雲はれて。光りもあけの。玉垣かゝやき神躰あらはれおはします　打上實や尊さ相好。まのあたりある神德をうくるも君の惠かな　上地「迎夜遊の神祭。くはしくいさや顯はし彼まれ人をおくさめん　上地「扨神樂の役々は「住吉鹿嶋　上同　諏訪熱田。其外　三千世界の諸神は爰に影向おりゝ。取〻の小忌の袖。へす、かへすもおもしろや　打上舞樂も今は時過て。〳〵更行ら。時雨る雲の。沖よりはやて吹たつ浪は海龍王の。出現かや　龍神上「抑。是は。海龍王とは我事おり扨も毎年竜宮より。こかねの箱に小龍をいき。神前に捧げ。中おり　上同　龍神。則。あらはれて〳〵浪を拂ひ潮を退け汀にあがり。御箱すへをき神前を拜し。渴仰せり　上同　打上其時龍神御箱のふたを。〳〵。忽ひらき。小龍を取出し。則。神前にさゝけ中。海陸ともに治る御代の寶有難き。めくみかな　下シテ　打上「四海安全に國治り。〳〵君を守るへしとさて。五穀成就福壽圓滿にいよ〳〵

ゆふしての數々は神々取々に見さきを拂ひ。神あけのおやまにあからせ給へは龍神平地にはらんをおこし。さかまくうしほにひかれゆけは。諸神は虛空に變滿しつゝ。けにあらたなる神は社內。けにあらたなる神は社內。龍神は。海中お入にけり

東方朔

恭くも悉達太子は。仙人につかへおはしまし採菓汲水年を經て終に成道し給ひて。大聖世尊となり給ふ　打上かるゝ仙人の其數。限りも知らぬ中にも西王母と聞えしは。西方極樂無量壽佛の化現なれは。はかりなき命の。仙人と成り目出たさ。されは園生にうゝる桃の。三千年に一度花咲實なる此木の仙藥と成るふしきある　上シテ「今はつゝまし我社は。其名も世々お隱れなき。東方朔と聞ねしは。此老翁か

事なり。きみ　桃實を開召さは。御壽命、長遊に御身も。息災あるへし。急き王母を伴ひ重ねて。參內申さんと庭上をたちて歸る浪の。聲はかり殘りつゝ。形は雲に入にけり〳〵（浮シテ上）「抑是は仙鄉にいつてとしをふる。東方朔とは我事なり。扨も我九千歲の齡ひをふる事。王母か桃實を三度迄服せし故也。今又目出度御代なれは。急いて君にさゝけ申さん上かん　いかにや如何に西王母。とくとく參內申へし（上地打上）ふしきや西の空よりも。〳〵白雲一むら降るゝと見えしか。三足の青鳥翅をならへて飛廻り。姿も妙なる王母は出立光りもかゝやく衣冠を着し。はんれうに乘して顯れ給ふまのあたりなる寄特かな（打上）「王母は庭上に歩みいて。（下同）〳〵て。彼桃實を捧もつて。上覽に備へ　奉れは。帝王御感のあまりにや。糸竹のしらへ數を尽し。皆一同にかなて給ふ舞樂の秘曲は面しろや（上地打上）舞樂も漸く時過てゆ〳〵。夕陽西にかたふきけれは。をの〳〵。君に御暇申。歸らんとせしに。帝王名殘を惜み給ひ。重て參內申へしと宣旨を蒙り二人は伴ひ出けるか。王母ははんれうに、ゆらりと打乘遙の雲路によち上り。はるかの雲路によぢの波にて。又天上にゝ歸りける

浦嶋

「理りや扨は仙女の計ひにて。（下同）「行や月日を此宮に。疊み隱して年並の。老せず死せぬ藥を籠て。淺間になさしとさしも實。あくあと敎へ給ひける詞をかへて明る宮の。ふた〳〵ひ返す甲斐もなくおいとなるころふ玄きなれ（下シテ）「北州の千年天上の五襲。（同）身にしらつゆの玉手筥明て悔しき。心かな（引クセ中）「明て見るへきは雨の夜に殘るわしたの月咲もみせぬ夜櫻。また時ならぬ鶏の。空音を聞し關の戸は。明しろ嬉しかりける。明て何より悅ひの。御代と成しは久堅の。天照太神の。素盞嗚の尊に襲はれ出て千早振。神も世中の。交はりやうき雲の。高天原の岩倉に。天れ戸を閉て跡はは。常闇の世と成し間は六の年。爰に月神の御子にうねみの尊其時の。御供に漏殘り。闇中に身を歎き。諸神を集め神うたや（上シテ）「御聲も妙なる舞の袖。（同）具榊とりて香久山のむすきか本つは。青和幣白和幣ひかたの鋭天照す。神も御

影を寫して「磐戸を去て出給へは。天地二度ひらけて國土ゆたかになる事も。岩戸を明し故うかし。夫は神代のいにしへ。是は人の今の代かゑとわ明て悦ひ。爰は明て悔しき浦嶋か箱ろよしなき」「偖々か樣に承る。御身は如何なる成人やらん」「今は何をかつゝむべき。我は蓬萊の仙女なるか。此君を守りつゝ。不死のくすりを與へん。暫く待せ給へやと。夕部の空の雲の浪。歸るも見みす成にけり〳〵」

天女上「有難や。かゝる聖主の代に引れ「有し昔の。舞歌の袖打上いて〳〵夢中に浦嶋の。〳〵。昔を語る神詫を見せんと五色の龜の寄白波は。いかさま竜神の參會なるかやわれ〳〵汀の。波の上龍神上「抑是は下界に住て神を敬ひ君を守り。殊には大慈大悲の悲願を行ふ。海竜王とは我事なり」「我は又玉の手筥を守る。浦嶋の神打上樂にすかたを顯はして。〳〵。竜神みきはの浪に座して。折柄を守護し又は神風に雲霧を拂つて。わたりも輝く玉の手箱を彼旅人の稀なる故に夢中に顯はし。見せ給ふ「夢とし覺すゝ稀人よ」「夜はまた明し玉手筥。はやくも治る君か代の。勅使を慰めの夜遊ろかし海竜王も。心せよ龍神上打上海龍王も神勅に應す。〳〵。今此君の御政德。猶も稀人に寄特を見せんと木綿四手の神こゝろ。竜神も心をひとつに成相の。春風も吹よせよさす汝もよせよとたかひに寄波のうしはのうへに。蓬萊山を浮へうかふれは草木もゆるき合五色の龜も。いさみ〳〵て汀によりろひふ死の藥を君にさゝけ。勅使に與へ是まておりと神は社内。龍神は海中に入とろ見みし。誠に君の威光にひかるゝ誠に君の威光にひかるゝ神の寄瑞の有かたさよ。

玉井

然れはたかゝきひめかきとゝのほり。たかとのやはかりのかみ御心安く思しめせ。先てうしんを尋つ

〜御國にかへし申へし　上シテ　なを　この　かみの　いかり　あらは　同　塩満しほひるの。ふたつの國を尊に奉りなは御とゝろに。まかせて國も久かたのわめより　くたる御神の。外祖とおりて豊姫もたゝならぬ姿有明の月日程なく三年を送り給へり　同　かくて三年に成ぬれは。我國にかへりのぼるへし。海路のしるへ如何おらん　同　御心やそく思し召せ。わたつみの宮主ともなひて。海中の乗物さま〳〵あり　上同　大わに〳〵乗しはやてを吹せ　陸地におくりつけ申さん。其程はまたせおはしませ　天女　光りちる。塩満玉のおのつから。曇らぬ御影。あふくなり　引　上地　打上灰開をの〳〵玉を棒けつゝ　引　〳〵。豊姫玉依二人の姫宮金銀わむりに玉をうをへ尊にをゝけ　奉　り。かのつり針を。待給ふわたつみのみやぬし。持参せよ　浮シテ上　「まうとの君のめいに隨ひ。わたつみの宮主てうしんを尋て。天孫のみまへに。たてまつる　打上　上地　塩満塩ひるふたつの　引　玉を〳〵。てうしんに取ろへさゝけ申。舞樂をうう し豊姫玉より袖を返して。　舞　給　上地　ふ　打上　何とも妙なる舞の袖　引　〳〵。玉のかむさふかつらのまゆすみ。月も照ろふ花のすかた雪を廻らす。袂かな　打上　下シテ　「わたつみのみやぬし　打上　下シテ　わたつみの宮主　同　姿はらうれうの雲に蟠り　かせ杖にすかり。左右にかへす。袂も花やかにわしふみはとう〳〵と柏子をろろへて時うつれは。　舞は浮座を立給ひ。かへり給へは袂にすかる。わたつみの乗ものを奉らんと。五丈のわに〳〵の勢奉り。二人の姫に玉をもたせ。龍王立りくる浪をはらひ。うしほをけたて。はるかにおくりつけたてまつり　遥に送りつけ　奉　りて。又竜宮にゝ歸りける

繪馬

シテ　上同　「人民快樂の御惠みを　上同　かけまくもかたしけなや。是をろたのむ神垣に　下シテ　繪馬は掛たりや。國土豊かになさふよ　上歌同　加茂のみあれのをりのひゝ〳〵。是を見事に御隨身。いろめく神の四手つけて掛ならへたる駒くらへかけて謹玄く聞ねしは松風のうへの藤浪尾上の花に咲そへて柳曳白雲。又かけて色を見するなり僧正遍昭はうたのさまはえたれとも　ま　とすくなしたとへは。繪にかける遊女の姿にめて〳〵徒に。心を動かすは。淺緑いとよりのけて繋く

駒は二道掛て中〳〵恨みしは。戀路の空情逢を
へゆめの手まくら（上シテ）「忍ふ今宵の顯れて。（同）詞をか
はす此うへは何をかつゝむへきわれらは伊勢のふ
たはしら夫婦と現し立出る。信すへし信せはうたか
ひあみの川竹の。夜も明ゆかは內外にて。待ねてま
み〳〵申さんと夜半に紛れて失にけり〳〵（上同）雲は
万里に治まりて。月詣の明神。御影の尊容を照しい
て給ふ（引）「浮シテ上」「我は日本秋津嶋の大棟梁。地神五代の
孫。天照太神（引上同）打上和光利物は御裳濯川の。（引）（上シテ）
「水を隔つる波のとし（上同）さを共誓ひは虛空に滿くる五
色の雲も。輝き出る日神の御像。有難や（打上）所は
齋宮の名にふりし。（同）〳〵。神垣しとろに木綿四手
の。あらはに神体顯れ給ふ。有（ワキ）「シテワカ上」むれや
かし。（引）天の岩戸に閉籠つて。（上同）〳〵。惡神をこら志光
奉らんとて日月二ツの御影を隱し。常闇の夜の
さていつまてか（下ツレ）「あらふる神々是を歎き。（同）て
いのにも御心とるや榊葉の。青和幣白和幣。
いろ〳〵樣々に飄ふ神樂の韓神催馬樂ちはやふ
る（シテワカ上）（引上同）（打上）面白や（打切）おもてしろやと覺ゆる岩戸を

少し開いて感し給へは。いつまて岩戸を手力雄
の明神ひきわけ御衣の袂にすかり給ひ。引連顯を
出給ふ有樣また珍らしき神あろひの。面白かりしを。
思し召忘れす高天のはらに神とゝまつて。天地ふた
ゝひ開け治まり國土も豊かに月日の光りの。長閑き
春社。久しけれ

和布刈

（シテサシ）「其御產の時豊玉姬。尊に向ひのたまはく。（同）產後に
をいて我姿を。わへて見給ふ事なかれと。御約束のみ
とのり。互にかたく。（引）誓ひ給ふ（引）然る其時至り。
さすかに御氣色いふかしく思しけるかとよ。かいまみ
せさせ給ひしを。いと淺ましと恨みかこちなかな
く海路の通ひを。立かくす波の玉の御子を。捨つ
〳〵豊玉姬は龍宮に入給ふ。ろの後潮さしひきの。朝暮
の時は有なから。しんちくるいの性を背き。さかひを
さかりにき（上シテ）「然るは神代のむかしより。（同）此はや
ともの神祭。神慮普き誓ひなれや。みはひさう
の雲の上しもは下界の龍神まで。渴仰の心中。
まことにふかき蒼海を。陸地にかして此國の。長門

のかよひ隔もおきのかいをうのみたからも。こゝろの如くなるへし　上ロンキ地　寶やこゝろのとくにて。此結縁もさま〳〵に人のねかひのかるへき　上シテ　「今は何をかつゝむへき。わかすむかたは久かたの　上地　「天津乙女の雲のうて　上シテ　「かさしの花の手向草　上地　「いろころかはれ　上同　「わたつみの花は波路の底よりも竜宮のさいけ物。あめつちともに渴仰の。天津乙女は雲にのれは。おきなは老の波にかくれ入給ひけりやかくれいらせ給ひけり　上同　「みきはに神幸なり給へは。〳〵虛空に音樂松風に和して。かう月照し。異香薫する龍女は波をもかさしの袖を返すもたちまふ。袂かな　下地　打上ナヲ　去程に〳〵めかりの時いたり虎嘯くや。かせとやとも。竜吟　すれは雲起り雨とふり潮も光り鳴動して沖よりは龍神あらはれたり打上　上同　「竜神すゑはち顯きて。〳〵引　「和布刈の所れ水底をうかち　上同　「はらふや潮瀬にとけるきのいろ菜つむめさしぬらすな沖に折浪沖にをれ波といふ汐をしりろけ屏風をたてたるとくにわかれて。海底のいさこは。平々たり　上ツヤキ　打上　「神ぬしたいまつふり立て。〳〵引　「。御鎌をもつて岩間をつたひ。傳ひくたつて。半町はかりの海底のめを刈。かゝへり給へは程おく跡に。しはさし滿て。もとのことくあらぬ海となつて。波白妙のわたつみ和田の原。天をひたし。雲の波煙の。波風海上におさまれは。なみかせ海上に治まれは蛇躰は竜宮にとんてろ入にける

定家

シテナシ　「今は玉の緒よ絶なはたゑねおかからへは　同　忍ふるとのよはるおる。こゝろの秋の花ずゝき。穂に出うめしの。たし世の。あたなる中の名は洩て。よろの聞すれとあ。人の契の色に出けるろかおおき。つゝむと成にけん。雲の通路絶ゑは大のたの。空おろろしき日の光。　上シテ　雲の　上シテ　「賓や歎くとも。こふとも逢んみちやなき。同　君かつらき果て。乙女の　姿　ととめえぬ心ろつらき諸共に　同　「賓や歎くとも。詠しけん心まで思へばかゝる執心の　「定の嶺の雲と。

家葛と身わ成て。の御跡にいつとなくはなれもやらで蔦紅葉の。色こかれまとはり。荆の髪もむすぼゝれ露玄もに消かへる妄執をたすけ給へや（上ロンキ地）ふりにし事を聞からに。けふも程なく呉服とりあやしや御身たれやらん（上シテ）「誰とてもなき身のはてはあさちふの。霜に朽にし名はかりは殘りても猶よしうあき（上地）「よしや草葉の忍ふとも。色わは出よ其名をも」（シテ）「今はつゝまじ。（地）此上はわをころ式子内親王。是まて見み來をとも。まを の姿はかけろふの石に殘す形たに。うれともみゝす蔦葛苦しみをたすけ給へと云ゐと見みて告にけり。〳〵（ワキ上歌）「夕もすくる月かけに。〳〵。松風吹て物すこき草の陰なる露の身を。思ひの玉のかず〳〵に。吊ふ緣は有難や〳〵（浮シテ下）「夢かとよ。閻のうつゝの。うつの山。月にもたとる。蔦のほろ道。昔は松風羅月に詞をかはし翠帳紅閨に枕をあらへ（地）「樣々成し情のすゑ（シテ）「花も紅葉も散々に（地）「朝れ雲（シテ）「夕の雨と（上同）ふるとも今のみも。夢も現も。まはろしも。共に無常の世と成て跡も殘らす。何中々の草の陰。さらは、葦の宿ならで。

ろとは難面定家かつら。是み給へや御僧（下ワキ）「あら痛はしの御有樣やな荒いたはしや。佛平等説如一味雨。隨衆生性。所受不同（下シテ）「御覽せよ身はわた浪の立居たに。おき跡迄も苦しみの。定家かつらに身をとちられて。かゝるくるしみ障なき處に有かたや只今讀誦し給ふは藥草喩品よなふ（ワキかん上）「なか〳〵おれや此妙典に。もるゝ草木のわらをれは。執心のかつらをかけはおれて。佛道おらせ給ふへし（シテ中）「荒有難やけにも〳〵是ろ妙成法の敎へ（上ワキ）「あまねき露の惠みを受て（シテ）「ふたつもなく（ワキ）「みつもおき（上同）一味の御法の雨のしたたり皆うるはひて。草木國土悉皆成佛のきを得ぬれは。定家葛もかゝる涙もはろ〳〵とけゐろこれはよろ〳〵と足弱車の火宅を出たる有かたさよ。此報恩にいさゝらは。ありし雲ゐの花の袖むかしを今に返すなる其舞ひめの小忌ころも（上シテ）「おもゐの舞の（地）「有樣やな（上シテ）「おもゐのまひの。有樣やゐ（上同）「おもゐやおもは遊の。有さまやな（下シテ）「本よりこの身は（上地）「月の貝はせも（下シテ）「曇りかちに（上地）「桂のまゆ墨も（下シテ）「おちふる〳〵涙の（上同）露と消ても抽なやにた

の葉の。葛城の神姿。はつかしやよしなや。よるの契りの夢のうちにも有つる所に歸るは葛のはの。もとのとくはひまとはるゝや定家かつら。はひまとはるゝやていか葛の。はかなくも形は理もれて。告にけり

楊貴妃

シテサシ「然るに二十五有のうち。何れか生者必滅の理りにもれん。先天上の五襄より。須彌の四州の樣々に。北州の千年終に朽ぬ　下シテ「いはんや老少不定のさかひ歎きの中の。なけきとか　引クセ　や我もろのかみは上界の諸仙たるか。往昔のちぎみ有て。かりに人界に生れきて。楊家の深窓に養はれ。いまた知人なかりしに君聞し召れつゝ。急き召出し后宮に定位置給ひ。僧老同穴のかたらひも絲つきぬれはいたつらに。又この嶋にたゝ獨。歸り來りてすむ水の。あはれはかなき身の露の。たまさかに逢見たり。餘に歸れうきむかし　上シテ「去にても。思ひ出れは恨みある。其文月の七日の夜。君とかたせしむつとの比翼連理のとのはもかれ〳〵になるさゝめことの。篠のひと

よの契りたに。名殘は思ふならひあるにやまして。やはて年月なれて程ふる世中に。さらぬ別のなかりせは千代も人にはうひてましよし夫とても遁れねぬ。會者定離ろと聞時は。逢ろわかれなりけれ　上地「うゐの曲　引　上シテ　マイ「羽衣の玉。まれにろかへす。をとめ子か　上同　打上付　袖うちふれる心しるしや。〳〵　下シテ「戀しきむかしの物語。同〳〵。盡さは月日もうつり舞のしるしのかんさし又たまはりて。いとま申てさらはとて。勅使は都に歸りけれは　シテ「去にても〳〵。同君にはこの世あひ見ん事もよもきか嶋つとりうき世おれとも。こひしやむかし。はかなやわかれのとこよのうてあに。ふしつみてろとゝまりける

千手

シテサシ「されは共時うつり平家の運命を〳〵。同月のよすからこゑ立て啼やをしかの津の國の。生田の河に身を捨て防き戰ふと申せ共　下シテ「杜の下風木の葉の露。同とされ。引けるころあはれなれ。引今は梓弓。よし力なし重衡も。ひかむとするにいつかたも。あみを置たるとくにて。遁れ難たる淀鯉の。生とられつゝ有てうき

身をうろくつの其儘に沉みは果すして。名をとゞめかせ川越の重房か手に渡り心の外の都いり上シテ「實や世中は。同さためなきかな神無月時雨ふりをく奈良坂や。衆徒の手に渡りなはとにもかくにも果はせて。又鎌倉に渡さるゝ爰はいつくゝろ八橋の。雲井の都いつかまた三河の國や遠江。あしから箱根うち過て。明もやすらん星月夜。かまくら山に入しかは。うき限りゝと思ひしにあるれは爰もしのひねに哀むかしを思ひ妻の。燈暗ふしては歎行虞氏か涙の雨さへしきる夜の空上シテ四面に楚歌の聲のうち。同何とか返す舞の袖。思ひの色にや出ぬらんあみたをそへて廻らすも。雪のふるねの枯てたに花さく千手の袖ならは。かさねていさやかへさん下地忘れめや上リキシテ「一樹の陰や一河の水上地「皆是他生の緣といふ。しら柏子をうたひける下ツレ「其時重衡けうに乘し。下同〳〵。琵琶を引よせ彈し給へはまた玉ことの絃合せに上地あはせて聞は翠の松風通ひ來にけり。琴を抱のみしか夜のうたゝね。夢も程なくしのゝめもほのゝと明渡る空の下シテ「あさまにや成ぬへき上同淺まに

や成あんと。酒宴をやめ給ふ御心の中ろ痛はしき上同かくて重衡勅により。〳〵。又都にと有しかは。もの〳〵ふ守護し出給へは下シテ「千手も泣々立出同何と中々のうき契り。はや衣〳〵あひはなるゝ袖と〳〵の露涙。下地寶重衡れ有樣めもあてられぬけしきかな〳〵

一人靜

下シテ「扨も義經けうとにしゆんせられ。既討手向ふと聞ゐしかは。小船に取のり。あたなへ神崎より。押渡らんとせしに。海路こゝろに任せす難風吹て。もとの地に着し事。天命かと思へは。科なかりしも下同「科有けるかと身を恨るはかりなり。去程に次第〳〵に道せはき。御身と成て此山に分入給ふ頃は春所は三芳野の花に宿かるしたふしも。のとかあらさる夜あらしにねもせぬ夢と花もちりやまを。上シテに一榮一らくまのあたりなる浮世とて又此山を落て行。上シテ「むかし清見原の天皇。同大伴の皇子におろはれて。かの山にふみ迷ひ。雪のこかけを。上地「組み給ひけるさくら木のみや。上地神の宮瀧西河の瀧。我ところおちゆけおちても

浪はかへるなり。去にても三芳野の。頼む木陰の花の雪。雨もたまらぬ奥山の音さわがしき春の夜の月はおぼろにてなをあしびきの山ふかみ分まよひ行有さまは（上シテ）「もろこしの佐國は花に身を捨て。遊子蹇月に行しも今身の上にしら雪の。花をふんでは同しく惜む少年の。春の夜もしつかなりてさわかしきみよしの〻。山風にちる花迄も追手の聲やらんと。跡をのみ見よし野の奥ふかくいろく山路かな（上同）夫のみおらすうかをしは。頼朝にめし出され。靜は舞の上手あり。とく〳〵と有しかは。心もとけぬ舞の袖。返す〳〵も恨めしき。むかし戀しき時の和歌（下シテ）「賤やしつ（上シテ）マヽ「賤やしつ。賤のをた巻。繰かへし「むかしを今に。あすよしもかな（下シテ）「思ひ返せは古へ（下同）の。〳〵戀しくもなきうきをの今も恨みの。衣川身祇は沈め。名をは沈める（下シテ）「物部の（上同）物をに浮世のならひあれはと思ふはかりろ山櫻。雪にふきおす。花の松風靜か跡をとひたまへ〳〵

祇王

（シテ）「一去不來の名殘さうとる別のたもと。（同）いつれの日を經てかはすををえん。誰あつて終りをかたらはんやあはれなりける　世中の夢現。きのふにかはりけふにさめまほろしの夢も幾度ろ。我らいやしくも遊女の道をふみうめし心はかおき色このみの。家櫻はあしはあた〳〵埋木の人しれ。世の ましはりやあしかきのやまめおる所とて。初花ず〳〵き露重み。穂に出かたき身なるへし。爰に平相國清盛の朝臣とて。今の世の武將たり。誰かは恐れさるへき。金玉玉殿に美女の數を集てはべる。漢宮四壁もとれにはいかて增るへき。中に祇王は好色れ。其名に免て〻參殿の。始よりも色ふかく比翼連理の其ちきり天長く地久し漆膠の約と聞ゐしに（上シテ）「時に佛と號してはべひとりの遊女あり。名にしおふ。佛神の感應か人こ〻ろうれは。はる習ひ故かかれにこ〻ろ掛帶の。引かへて舞の袖。實面白く花やかに。見る社聽て思ひ草。言の葉も中〳〵。恥のしき餘りありけり（下シテ）「羅綺の重衣たる情なきをきふに妬む。いつしか人のこ〻ろも煩らはし。去とては。（同）〳〵。中心に任せぬ此身の習ひ。佛はもとより舞の上手。和歌をあけては

袂をのへし。返しては唄ふや聲も霞むや春風の。花をちらすや舞の袖返す〳〵も。おもしろや打上人は何共花田の帶の〳〵。引かへ心はかゝるとも祇王御前心に置給ふな。我名は佛神かけて深き契りの中ろとはよしあやかしと諸共に空言なく社。ちぎりけれ

三　山

「又其頃かつら子さくら子とて。ふたりの遊女有しに。彼かしはての公成に。契りをこめて玉手箱。二道かくるさいかにの。いとあさからぬ思ひ妻の。月のよまさにゆき通ふ住家はうねみ耳おし山「里もふたつの采女のきぬ「他はおよ月よと。爭ひしに「上おとこうつらふ花心。彼櫻子におひきうつりて。みゝなしの里へはこさりけり。其時かつら子恨みはひ。扨は我には替るよの。夢もしはしの櫻子にうつりかはりて此方をは「下忘れ忍ふの軒の草。はやかれ〳〵に成ぬるろや「引クセ中桂子思ふ樣。本よりもたのまれぬ二道あれは其儘に有はつへしと思ひきや。其上何事も時にしたかふ世のあらひ。さら春の頃おをはやさかり成さ

くら子にうつる人をはうらむまし我は、花なきかつら子の。身をしれは春なから。秋にならんもことはりや。去はとにおきもせず。ねもせて夜半をあかしては春のものとて長雨ふる。夕くれに立出て。入相もつく〳〵と。南は香久山や。西は うねみの山に咲櫻、子の里みれは。余所めも花やかに浦山しくろおほゆる「上いきてよも明ひ迄人のつらからし。同此ゆふくれを限りろと。思ひさためてみゝなし山の池水の。淵に臨みて影うつる。名も月のかつらの緣の髮もさあからに。池の玉藻のぬれころも。身を投空しく成はてゝ。此世はにはやみなし山其名をあはれみて跡弔らはせ給へや「いかに申へき事のひ。疊をも名帳に入て給り候へ「安き間の事。扨御名を承りゆへし「名をは桂子とゆはしゆへ「何かつみ子とゆや「よし〳〵名をは申まし。只十念をさつけ給へ寶々さのみはとひかたし。掌を合せてなむあみた佛「南無あみた佛「下二人若我成佛十方世界。念佛虎生捗取不捨「下同是迄おりや名帳の。名はかつら子とかき給へ。是より外に我名をはいくたひ問せ給ふともいは

しやきかし見みなしの。いける者にはあらずとて池水の底に入にけり〳〵　「みゝおしの池の玉藻の濡衣。〳〵恨も袖に有明の其名も月のかつら子の。おき跡いさや吊はん〳〵」　「なふ上人。此みゝおしの山風に。吹さろはれて來りたり。これ〳〵たすけたひ給へ。」　我はあのうねみ山に住。さくら子とはれし女なるぞ。風の狂するこゝろ乱れに。加樣に狂ひさふらふなり。去とては上人よ。因果の花につきたゝる。あらしをのけてたひたまへ　「荒うら山しの櫻子や。又花の春におるよおふ。」　忘れてとしをへし物をみよかし顔に櫻子の。花の余所めもねたましや　光りちる。月のかつらも花ろかし。誰さくら子に。うつるらん　「盛とて。光りを理む花こゝろ爭おかねて桂子か。「恨みろ增る。櫻子の　「花もちりおは青葉ろかを。「おとや桂を隔つらん打上」恥かしやおを妄執は有明の。つきぬ恨を御前にて。懺悔の姿を顯す也　「あれ御覽せよ櫻子の。よろめに余る花心理り過るけしきかな「本より時ある春の花。咲はひか事なき物を　「花もものいはすと開つるに。なと言のはをきかすらん　「春いくはくの身にしあれは。影辰をうこかすあり「扨花はちりても「又もさかん「春は年々ツレ「ころは「彌生に　上同　又花の咲ろやや〳〵。みをはよろめも妬ましき。花のうはありうたむとて。桂のたちねを折もちて。見みおしの山かせ。松風春風もふく吹よせて〳〵。雪とちれ櫻子。雲とおれをくら子。花はねにかへれ。我も人しれすねたさも妬しうはありを。打發しうち發す。中にうて共さらぬは家の。犬櫻花にふしてほね。叫ひ腦み乱る〳〵花心。うねみのやまふと成し。因果の焔の火さくら子。扨とりや偖とりやゝ荒よろめをかしやゝ因果のむくひは是迄也花の春一時の。うらみをはれてすみやかに。有明をくら光りろふ。月の桂子諸共に。西に生る〳〵一盞のゝ御法を受るおりあと吊ひてたひたまへ

蟬丸

「遠くはしようをう淨眼さうりろくり。ちかくは又應神天皇の御子。同中難波の皇子宇治の見を。たかひに即位謙讓の御心さし。皆是連理の情とかや「去おなら爰はせうとの宿り共。同思はさりしにわらやのうち。

の一曲なくはかくゝとものいかてしるへの四の緒に「ひかをて笑によるへの水の。同淺からさりし。契りかな」世は末世に及ふとても。日月は地におちぬ。あらひとてろ思ひしに。我らいかあをは皇子を出てかくはかは。人臣にたにましはらて。雲井の空をも迷ひ來て都鄙遠境の狂人路頭山林の賤を成て。邊土旅人の憐みを頼む斗あり。去にても昨日迄は。玉樓金殿の床をみかきて玉きぬの。袖ひきかへてけふは又。かゝる所のふしとゝいて。竹のはしらに竹のかき軒も雁もまはらなる。「わらやの床にわらの窓。しく物とてもわらむしろ。是う古しへの錦の茵なるへし「たゝ〳〵」とふものとては。同嶺に木傳ふ猿の聲。袖をうるはす村雨の。音にたゝへて琵琶の音を。引おらしひきおらし。我ねをもなく涙の。雨たにも音せぬわらやの軒のひま〳〵に。時々月はもるなから。めにみる事のかなはねは。月にも疎く雨をたあ。聞ぬわらやの起ふしを。思ひやられて痛はしや。上ロンキ是迄なりやいつまても。名殘は更に盡すまし。暇申て蟬丸上ツレ「」樹の陰の宿りとて。夫たに有にまして實。せう

との宮の御別れとまるを思ひやり給へ。上シテ「實痛はしや我なから。行は慰むかたもあり。とまるをさとろとゝいふ雲のたち休らひて泣居たり。上ツレ「なくや關路の夕からす。うかれ心はうは玉の。下シテ「我黒かみのあかて行。ツレ「別路留よ逢坂の。シテ「關の杉村過ゆけは。ツレ「人聲遠く成ま〳〵に。シテ「わらやの軒に。ツレ「たゝす見て。同たかひにさらはよつねには問せ給へと。シテ「かすかに聲のする程き〳〵送り歸り見置てあく〳〵別れおはしませ〳〵

三井寺

シテ「其外爰にも世々の人。言葉のはやしのかねてきく。同名も高砂の尾上の鐘。あかつきかけて秋れ霜。曇るか月もこもりくの。初瀬も遠し難波寺。下シテ「名所多き鐘の音。同盡ぬや法の聲ならん。ツレ「山寺の春の夕暮來て見れは入相の鐘に。花う散ける。實おし先とも。なと夢の春と暮ぬらん。其外曉の。殊背を惜む衣〳〵。の。恨をうふる行衛にも枕の鐘や響らん。又待霄に更行かねの聲きけは。あの ぬ 別 片地 の鳥は。物かはと詠せしも。戀路の便りの音信の聲と聞ものを。又は老らくの。寢覺はとふる古しへを。今思ひ寢の

夢たにもなみた心のをしさに此墨のつくづくと。思ひを盡す曉をいつの時にか競へまし「月落鳥啼て。霜天に滿て冷しく江村の漁火もほのかに半夜の鐘のひゝきは客の船にや。通ふらん蓬窓雨しだ〳〵りて馴し堤路の楫まくら。うき寢ろかはる此海は。浪風も靜にて。秋の夜すがら月すむ。三井寺の鐘ろさやけき　荒痛はしの御事や。余所めも時によるものを逢をよろこひ給ふへし　「嬉しなからも衰ふる。姿はさすか愧しのもりて餘をる涙のな「質逢かたき親と子の。緣は盡せぬ契りとて「日ころ多きに今夜しも「此三井寺に廻り來て「親子にあふは「何故ろ此かねの聲たて〳〵物くるひの有ろとてかとかめ有し故なれは。常の契りには。別れの鐘と厭ひしに親子の爲の契りには。鐘故にあふよおり嬉き鐘の聲かおかくて伴ひ立かへり。〳〵。親子のちきりつきせすも。富貴の家となりにけり。賢有かたき孝行の。威德ろ充てたかりける威德ろめてたかりける

礎

上シテ「きうろう高くたゝて。風北に廻り。ぞんてむゆる

く。急にして。月西に流る　蘇武か旅寢は北の國。是は東の空なれは。西より來る秋の風の。吹おくれとまとふの衣うたふよ。上歌　薔薇の軒端の松も心せよ。〳〵。おのかえた〳〵に。あらしの音を殘すなよ。今は礎の聲添て君かろなたにふけや風。餘りに吹て松風よ。我こゝろ通ひて人にみゆならは。其夢を破るな破れて後は此ころもたれか來てもとふべき來てとふからはいつ迄も。衣はたちもかへなん夏衣。うすき契りはいまはしや。君か命はなかき夜の。月には迎もねられぬにいさ〳〵。衣うたふよ。彼織女のちきりにはひと夜とかりのかり衣。天の河なみ立へたて。あふせかひなき浮舟の。梶の葉もろき露なみた。ふたつの袖やしはるらん。水かけ草おらは。浪打よせよ〳〵たかた　上シテ「文月七日のあかつきや。同八月九月寶まさに長き夜。千聲万聲のうきを人にしらせはや。月の色風のけしき。影にをく霜迄も心すこき折節に。きぬたのをと。夜嵐悲しみの聲むしの音ましりておつる露涙はろ。〳〵はらはら〳〵と。いつれ礎の音やらん　「いかに申し。都より人の參りてし。殿

は今年は暮にも御下り有ましきふてい。「恨めしや責ては年の暮を社。いつはりおからも待つるに。扨はは
や眦にかはと果給ふろや「思はしと思ふ心もよはるかな上歌聲も枯野の虫の音の。乱るゝ草のはなこゝろ。風
狂したる心ちして。やまふの床に臥しつゝみ。終に空き
くなりにけり〳〵」「むさんやあさしも契りしつま
との。引別れにし其儘にて。つゐの別れと成けるうや
先た〳〵ぬ悔の八千たひも〳〵よくさ。〳〵の。陰よ
りも二度歸り來る道と聞からに。梓の弓のうらはず
に。言葉をのはす。哀れさよ〳〵。「三瀬川。しこみ果にし。うたかたの哀はかなき。身の行衛かな。ひ
やうはい花の光りをならへ。娑婆の春を顯はし。あと
の知への灯は眞如の秋の。月をみす〳〵引る。さりおか
ら我は邪婬の業深き。思ひのけふりの立居たに。安か
らさりし報の罪の。乱るゝ心のいとせめて。獄卒あ
はうらせつの。標の數の障もおく。うてやうてやとむ
くひの礎。うらめしかりける。因果の安執因果
のまうしうの思ひのあんた。礎にかゝれは涙はか
へつて。火焔と成て。胸の煙のほのはにむせへは

さけへと聲か出はこゝろ。きぬたもをとおく。松風も
聞わす呵責の聲のみ。怖ろしや打上羊のあゆみ隙の駒
〳〵。移りゆくある六の道。因果の小車の火宅の
門を出されは。めくり廻れとも生死の海は離る
ましやあちきなのうき世や「恨は葛の葉の〳〵
歸りかねて。執心の面影のはつかしや思ひ妻のふ
た世と契りても猶。末の松山千代迄と。かけし
頼みは仇波の。あらよしあやうらことやうもかゝる
人のこゝろか。鴈鳥おふろとりも心して。うつし人
とは誰かいふ。草木も時をしり。鳥けたものも心あれ
や。實まことへつる蘇武は旅鴈に文をつけ。萬里
の南國に至りしも。契りの深き志さし。淺からさり
し故ろかし。君いかなれは旅まくら夜寒のころも
うつゝとも。夢ともせめてなと思ひしらすや恨めし
「法華讀誦の力にて。〳〵。幽靈まさに成佛の
道あきらかに成にけり。是も思へは假初に。うちしき
ぬたの聲のうち。ひらくる法の花心。菩提の種と成
にけり〳〵

求塚

ワキ上歌「一夜臥をしかのつの〜塚の草。〳〵陰より見みし亡魂を。吊ふ法の聲立て。南無幽靈成等正覺。出離生死頓證菩提。中ロ「あふ曠野人稀なり。我古墳おらて又何者ぞ。骸を爭ふ猛獸は。さつてまた殘る。塚を守るひはくは松風に飛。雷光朝露猶もつて眼にあり。古墳多くは少年の人。生田の名にも似ぬ命「去て久しき古郷の人の「御法の聲は有難や　荒閻浮戀しや。打上をれは人一日一夜をふるにたに。〳〵八億四千の思ひあり。況や我らは。去にし跡も久かたの。天のみかどの御代より。今は後の掘川の御宇にあはゝ我も。ふたゝひ世にも歸れかし。何時まて草のかけ。苔の下には埋れんさらはうつもれもはてすして。苦しみは身を燒火宅はすみか御覽せよ〳〵

「荒いたはしの御有樣やな。一念ひるかへせは無量の罪をも遁るへし。種々諸惡趣地獄鬼畜生。生老病死苦以漸悉令滅。はや〳〵浮ひ給へ「有難や此くるしみの障なきに。御法の盤の耳にふれて。大焦熱の煙の中に晴間の少し見ゆるろや。有かたや。怖しやおとはたろ。何小竹田おとこの亡心とや。又此方成は血沼の丈告。左右の手をとつて。來れ〳〵と責れとも。下詞三界火宅の栖をは。何と力に出へきろ。又怖ヒやひはく飛さり目の前に。來るをみれは鴛鴦の。鉄鳥となつて黒銅の。階足つるきのをく成か。頭をつゝきすいを喰ふ。こはろも蓋かおせる科かや。下詞恨めしや。なふ御僧上ワキかん「實苦しみの此苦しみをは。何とか助け給ふへき時來ると。云もあへねは塚の上に。火焔一村飛翼ひて「光りはひはくの鬼となつて「標を振上追たつれは「行むとすれは前は海「うしろは火焔「左も「右も「水火の責に詰られて「詮方おくて「火宅のはしらに上同「すかりつき取付は。はしらは則火焔と成て。火の柱を抱ろとよ荒あつや。堪かたや五躰はおき火の黒焔と成たるろや。下シテ「而うして起上れは。同〳〵獄卒は標をあて。追立れはたゝひ出て。八大地獄の數々苦しみを盡し御前にて。下シテ「悔の有樣見せ申さん先等活黒繩衆合。叫喚大叫喚。炎熱極熱無間の底に。足上頭下と落る間は三年三月の苦しみ果て。少し苦患の障かと思へは。鬼もさり。火焔も消て。暗闇と成ぬれは。今は火宅ふ歸らんと。有つる栖わ

いつくゝりと。やくらさわ闘しあなたを尋ね。こゝあたを
もとめ塚。いつくやらんともとめ求めたとりゆけは
なかるも　とめねたまや求めつかの。草の陰野の露消
て草のかけのゝつゆ消きねとや亡者のかたちは失
にけり亡者の影は失にけり

綾　皷

シテ「後の世のちかくなるをは驚かて。老にろへたる戀
暮の秋。同露も涙もろはちつゝ。心のらなる花の面の。草
の秋に色うへて何を忍ふの乱れこゝ。下シテ「忘れんと思ふ
こゝろこゝろ。同忘れぬよりは。引おもひなれ。引クセ。やしかる
に世中は。人間万事さいおうか馬なれや。障行日数う
つるなる。としさり時は來れとも。つゝに行へき遊芝
の露。命のかきりをは。誰にとはましあちき
なや。なとされは是程に。しらはさのみにまよふらん
上シテ「驚けとてやしのゝめの。同眠りをさます時守の。打
や皷の數しけく。ねにたゝは待人の面影もしやみけ
しの。綾の皷とはしらすして。老の衣手力ろへて。
うてとも聞へぬは。もしも老耳の故やらんと。きけ
共〳〵。池のなみ窓の雨。いつれも打音はそれ

とも。音せぬ物はこのつゝみの。あやしの太皷やなに
とて。ねは出ぬろ。上ロンギ地思ひやうちも忘るゝと。綾の
つゝみのねも我も出ぬを人や待らん。上シテ「出もせぬ
雨夜の月を待かねる。こゝろの闇をはらすへき時の
つゝ見もあらはころ。上地「時のつゝみのうつる日のきの
ふけふとは思へとも。シテ「頼めし人は夢にたに。地「みねぬお
もひに明暮の。シテ「皷もあらす。地「人も見みすては何と
なる神も。思ふ中をはさけぬところ。間し物をなと
さきは。かはとに縁なかるらむと。身をうらみ人を
かこちの角ては何のため。いけらんものを池水に
身を投て失にけりうき身を投て失にけり。上ツレかん「如何に
人々きくか扨。あの涙のうつ音か。皷のこゑに似たる
はいかに。上荒面白のつゝみのこゑや。あらおもしろや
上ワキかん「ふしきやな女御の御姿。さもうつゝなく見み
給ふは。いか成事にて有やらん。ツレせん「うたゝなきころ理
りなれ。綾の皷はなる物か。ならぬをうてといひし事は。
我現おきはしめおれと。ワキ「夕波さわく池の面に。ツレ「猶打ろ
ふる。ワキ「こゑありて。浮シテ上「池水の。もくつと成し老の浪。地
又たち帰る執心の恨み。シテ「うらみとも歎きとも。いへは

なか〳〵おろかなる「上同」一念瞋恚の邪婬の恨み。はをましや〳〵こゝろの雲水の。魔境の鬼と今ゝなる小山田の苗代水はたゑす共。こゝろの池のいひはなさしと社おもひしに。なとしもされは惜なく。ならぬ皷の聲たてよとは。こゝろを尽し果よとや「下かん」「心つくしの水の間の月の「上地」「かつらにかけたる綾の皷「上」「なる物か〳〵〳〵〳〵〳〵打て見給へ「上同」うてや〳〵と責つゝみよせ柏子とう〳〵〳〵打給へ〳〵〳〵とて。じもとを振上責。奉れは皷はあらてかなしや〳〵と。叫ひまします女御の御聲。あら扨こりや扨こりや「上同」打上冥途のせつきあはうらせつ。〳〵の。呵責もかくやらんと身を責骨をくたく火車のせめと云ともこれ是にはまさらし恐しやさて何とかなるへき因果ろや「下シテ」因果れきせんはまのあたり。「下同」れきせんはまのあたり知れたり白波の池の。邊りの桂木に掛し皷の時もわかす。打よはりこゝろつきてかの池水に身を投て波の藻屑としつみし身のかほともおく死靈と成てかの女御につきたゝつて。しもとも浪もうちたゝく池の氷の東頭は。かせ渡り雨おちて「上」紅蓮大紅蓮とあつて。身の毛もよたつ波の上に。りきよか躍る惡蛇と成て。まとはめいとの鬼と云共かくやとおもひしら波の。荒恨めしやうらめしや。あらうらめしや。恨めしの女御やとて。戀のふちにろ入にける

弱法師

「シテナシ」「ロクロ」「然るに此中間において。何と心をのはめまし。「同」是によにて上宮太子。國家を改め万民を敬へ。佛法流布の世と成て遍く惡を弘め給ふ「其後當寺を御建立あつて。「同」はしめて僧尼の姿を顯はし。四天王寺と。「引」名付給ふ「引」金堂の御本尊は。如意輪の佛像救世觀音とも申すとか。太子の御前生。震旦國の思禪師にてかの渡らせたまふ故。出離の佛像に應しつゝいま日域に至る迄。佛法最初の御本尊と。顯れ給ふ御威光のかの誠なるかなかや。末世相應の御誓ひ。しかるにかの當寺の佛閣のかの御作りの品々も赤栴檀の靈木にて。塔婆の金寶に至る迄。閻浮檀金なるとかや「上シテ」「萬代に。ずめる龜非の水まても。「同」水上清き西天の。無熱池の池水をうけつきて。流れ久しき世々迄もかの五濁の人間を道引てかの濟度の舟をもよするなる難波の寺の

鐘の聲。と浦々にひゝき來て。あまねき醫ひみちゝ盤のおしてる海山も。皆成佛の姿あり「荒面白や我盲目とならさりしさきは。常にみあれし境界なれは。何うたかひも難波江の。江月照し松風吹。永夜の清霄何のなす所ろや。住吉の。松の隙より。詠むれは

「月落かゝる淡路嶋山と「詠しは月影の。今は入日や落かゝるらむ。日想觀なれはくもりも波の。淡路繪島須磨あかし。紀の海まても。みゝたり〳〵滿目青山はこゝろにあり「あふ。見るろとよ〳〵「扨難波の浦の。致景の數〳〵「南はさゝろと夕波の住吉の松陰「ひかしの方は時を得て「春のみとりの草香山「北はいにく「難波なる。長柄の橋のいたつらにかなたこなたとありくほとに。盲目のかなしさは。貴賤の人に行あひの。まろひたゝよひ難波江の。足もとはよろ〳〵とけにも誠のよろはしとて。人は笑ふ給ふろや。思へは恥かしやあ今は狂ひひまし今よりは更に狂はし

今はは。や夜もふけ人もしつまりぬ。いかなる人の果やらん其名を名乗たまへや「思ひよらすや

誰なれは。我古しへを問給ふ。高安のさとなり。玄後德丸かはてあり「扨は婦しや是ころは。父高安の通俊よ「ろも通俊は我父の其御聲と聞よりもむね打をわきあきれつゝ「こあゆめとかて俊德は親あからはつかしとてあらぬ方へ逃ゆけは。父は追付手をとりて。何をかつゝむ難波寺の鐘の聲も夜まきれに。あけぬ先にといさあひ。明ぬさきにといさあひ高安の里に歸りけり〳〵

通小町

「此草庵を立出て。〳〵猶草深〳〵つゆしけき市原野へに尋ねゆきや。座具をの〳〵香を焚。南無幽靈成等正覺。出離生死頓證菩提。うれしの御僧の吊ひやあ。同しくはかい授け給へ御僧「いや御僧。戒授け給はゝ。恨み申へしはや。歸り給へ。御僧達猶も其身は迷ふとも。〳〵。戒力にひかれて。なとか佛道ならさらんた〳〵共に戒を受給へ「人の心は白雲の。我は曇らしこゝろの月。出て御僧にとはれんと。蹈かし分出れは「つゝめと我も穢に出て。〳〵。尾花招かはとまれかし「思ひは山のかせきにて。招〳〵と更に

とまるまし。「さらは頭巾の犬をおつてうたるゝとはおれし」「恐ろしの姿や」「袂をとつて。引とむる」「ひかるゝ袖も」「ひかふる　我　袂も。ともになみたの露。深草の少將」「扨は小野小町四位の少將にてましますかや。迎の事に車の榻に。百夜通ひし所をまなふて御見せゝへ」「本より我は白雲の。かゝるまよひの有けるとは」「思ひもよらぬ車の榻に。百夜通へと僞りしを。誠と思ひ。曉とに忍ひくるまの榻にゆけは」「車の物見もつゝましや。姿をかへよと云しかは」「こし車は云に及はす」「いつか思ひは」「山城の木幡の里に馬はあれども。君を思へはかちはたし」「扨其姿は」「笠に見の」「身のうき世とや竹の杖」「月には行も暗からす」「扨雪には」「袖を打拂ひ」「偖雨の夜は」「目に見みぬ。鬼一口もおそろしや」「たまゝ曇らぬとき左にも」「身獨にふる涙の雨の」「あら晴の夜や」「夕暮は。一かたならぬ。思ひかなゆふくれはなにと」「ひとかたならぬ。思ひかな」「月はまつらん」「月をは待らん」「ぬれをは待し。そちことや」「あかつきは〳〵。數々おはさの。思ひかな」「我

ためおらは。」「鳥もよしなけ鐘もたゝなを夜もあけよたゝひとりねならは。つらからし」「か樣にこゝろを盡しつくし。」「棚れかすゝよみてみれは。九十九夜なを今は一夜ようれしやとて。待日になりぬ急いてゆかん姿はいかに」「笠も見苦し」「風折ゑほし」「箕をもぬきすて」「花摺ころもの」「色かさぬ」「うらむらさきの」「藤はかま」「待らんものをあらいろかしや。すはやけふも」「くれゐ井のかりきぬの。衣紋けたかく引つくろひ。飲酒はいかゐ月のさかつきおりとても。いましめならはたもたんと。唯一念の悟りにて。おほくのつみを滅して小野の小町も少將も。共に佛道なりにけり〳〵

籠太皷

「面白し〳〵。異國にも去た先しあり。か樣に皷を掛て時を守し事もあり。其心を知りて古き歌に。時もりのうちまつゝみ聲きけは。時にはなりぬ。君は遲くて」「おろくも君か。來ん迄ろ」「なふ此皷を擂て心か慰みたうい」「安き間の事如何樣にも擂て慰みいへ」「皷の聲も音にたて〳〵」「なく鶯の青葉れ竹

湘浦のうらや。姱皇女英「諫皷苦むす此つゝみ「うつゝもなやなゝかしや打上皷の聲も時過てゝ。日も西山にかたふけはよるの空もちかつく六つのつゝみうたふよ。五つの皷は偽とのの。契りあたなる妻との。ひき離れいつくにか我とく忍ひねのやはらゝうたふよやはらゝうたふよ。四つの皷は世中に。ゝ。ゝ。戀と云事も。恨みといふ事も。なき習ひならは獨り物は思はし「九つの。ゝ。夜半にも成たりや荒戀し。我つまの面影に立たりうれしや責てけに。身かわとに立て社は二世のかひも有へけれ。此籠出る事あらしおつかしのこの籠や。あらなに。かしの此籠「此上は餘訪八幡も御知見あれ。夫婦共に助くるろ早とく出給へ「實此うへは御偽りはよもあらし。誠は夫の有所。筑前の宰府に知人あれは。其方へ行てやゝ覽「いしくも隱さす申たり。しかも今年は我親の。十三年にあたりたれは「咎ありとても助け船の。「松浦の川や西のうみ「彼國ちかき極樂の「みた誓願の誓ひかや。科を助くる憐ひの荒有かたの御慈悲やゥ聽て時日をうつさすゝ。かくれし夫を尋ねつゝ。もとのをくに歸りゐて。結ふ契りの末久に。松浦の川や二世の緣。實有難きこゝろかなゝ

自然居士

「爰に又蚩尤といへる逆臣あり。かれをはろはをんとし給ふに。烏江といふ海を隔て。責へき樣もおかりしに黄帝の臣下に。貨狄といへる士卒あり。或時貨狄庭上の。池の面を見渡せは折節秋の末なるに寒き嵐にちる柳の一葉水ふ浮ひしに。又蜘といふ虫。是も虛空に落けるか其一葉のうへに乘つゝ。次第ゝにさゝ蟹のいとはかをくも柳の葉を。吹くる風に誘はれ。汀に寄し秋霧の。たちくる蜘の振舞實もと思ひろめしよりたくみて舟を作れり。黄帝是に召れて烏江を漕渡りて蚩尤を安く亡ぼし。御代を治め給ふ事一万八千歳とかや「然れは船のせんの字を。さみにすゝむと書たり。扨また天子の御かほ龍顔と名付奉り。舟を一葉といふと此御字よりはしまれり。又「君」の御座舟を龍頭鷁舟と申も此御代よりおこれり「うれさゝらのおこりを尋ぬるに。東山に

ある僧の。扇の上に木の葉の散しを。數珠にて拂ひしときよりも。さゝらと云事始りたり。居士も又其をくさゝらのこには百八の數珠。さゝらの竹には扇の骨。おつとり合せこれをする「ところは志賀のうらなれは下同さゝ浪や〳〵。しの辛崎の。松の上葉をさらり〳〵とさゝらの眞似を。しゆすにてすれは。さゝらより猶手をもする物今は助けてたひ給へ上同本來皷は浪の音引上同打上本より皷は波のをと。よせてはきしをとうとはうち。あま雲まよふ鳴神の。とゝろ〳〵とおる時は。ふり〳〵る雨はは〳〵ら〳〵とをさゝの竹のさゝらをすり。狂言なから。も法の道。今は菩提の岸によせくる舟のうちより。ていとうとうちつれて。共に都に。上りけり〳〵

東岸居士

「但正像すてにくれて。末法に生を受たり。下同かるかゆへに春過秋來れとも。進みかたきは出離の道上シテ「花を惜み月を見ても。起り安きは妄念なり。上同罪障の山には。いつとおく。煩惱の雲あつうして。佛日の光り晴難く上シテ「生死の海にはとこしなへに。同無明の波荒くして。眞如の月宿らず引クセ生をうくるに任せて。苦にくるしみを受かさね。死にかへるにしたかつて。聞きより〳〵らきに趣く。六道のちまたには。迷はぬ所もおく。生死の扉には宿らぬ栖もおし。生死の轉變をは夢とやいはん。又うつゝとやせんとれらありと。いはんとすれは。片地上雲とのはと煙と消て後其あとをとゝむへくもなし。なしといはんとすれは又恩愛の中。こゝろとゝまつて腸をたちたましゐをうしかさすと云事なし。彼芝蘭の契と。の袂にはかはねをは愁歎のほのはにとかせ共。紅蓮大。紅蓮の氷をは終にとかす事おし。鰐鯊のふすまの下に眼をは。慈悲の涙にうるはせとも焦熱大。焦熱の焰をは。終にしをする事なし。かゝるつたなき身を持て上シテ「救生偸盗邪婬は。同身にをいて作る罪おり。妄語綺語。惡口両舌はくちにて作る罪おり。貪欲嗔恚愚癡は又。心にをいて絶せす御法れ船のみおれ掉。皆かのきしに至らん

「迎の事に鍋皷をうちて御見せいへ「面白や松ふく風さつ〳〵として。浪の聲はう〳〵たり「所は名におふ洛陽の。詠もちかき白河の「波のつゝみや風の

さゝら（ワキかん）「打つをゆくや橋の上「男女の往來「貴賤上下の（上三人）「ろてをつらねて玉きぬの。さい〳〵沈み浮波の。さいら八撥うちつれて（下シテ）「百千とり（上シテ カツコ）「百千鳥。囃る春は。ものごとに（下地）「あらたまれども。我ろふりゆく（下シテ）「行は白川（下地）「行はしら川の。橋をへたて〳〵むかひは（シテ）「東岸（地）「此方は（シテ）「西岸（地）「さゝ波は「さゝら（地）「打波は（シテ）「つゝみ（同）「いつれもいつをも極樂の。歌舞の菩薩の御法とはきゝはしらずや旅人よたび人よ（上同）あらおもしろや（シテ）「あふ南無三寶（上同）けに太皷も羯皷もふゐひちりき。絃管ともに。極樂の菩薩のあろひと聞ものを（下シテ）「何とたゝ（下同）あにとたゝ雪やこほりとへたつらん。萬法皆一如なる實相のかとにいらふよ〳〵

小袖曽我

（シテナシ）「夫に時宗を法師にならぬとの御勘當（同）たとひ仰に隨ひ出家仕りいとも。我らか事は世に隱れなし。あれ見よ河津か子供とろ。かたきを遁れんとの出家。正しく求法の爲ならずと。同宿も思ひ賤しまは。心も染ぬ墨衣の浦嶋か子の箱根寺にて。明暮悔しと思ふあらは。なか〳〵俗には劣るへし（明クセ）時宗は箕根に有し驗に。法花經一部讀覺へ。常は讀誦し母上の（ハ）現世安穩後生善所と祈念する。又は毎日に。六万遍の念佛。父河津とのに回向する。か程に他念おき身を此三年不孝蒙る（ア）愚顏を拜せぬは御戀しさもひとつ又は（ハ）狩場へれ門出御暇（片地）乞しさ一方あらぬ望おり（ヤ）大かた治まる御代なれとも。狩場やすなとりに。不慮の爭ひ有物を（上シテ）「其上我等は（同）狩場に於て例あしゝ。昔を思ひ伊豆の奥の。赤澤山の狩競にて。父も失させ給はすや今迎も。狩場をあらはなとしも。御こゝろにも遠さるとも。恨み貞にて兄弟は。泣なく立て出けれ（上ツレ）は（ヤ）「母は壁を上。あれ留給へ人〻よ。（同）不孝をも勘當をもゆるすう〳〵時宗とて泣〻出させ給へは（下シテ）「兄弟は嬉し泣に伏まろへはや（同）見る人も思ひやりでなきねたりや（片地 ツレ同）「祐成申に依て。時宗か勘當ゆるすにて（シテ同）あるう。近う來りて狩場への門出祝ひて御入れへ

「如何に時宗。ちかう參りて此年月の御物語申れへ去にても（上同）「此程時宗か。盡す心に引替て。今はいつしか親と子の母のなさけ有かたや。餘（之）のうれしさに

祐成御酌に立て取々時宗と共に祝言を。謠ふこと「高き名を。雲井に上て富士の根の「雪を廻らす。舞のかざし打上舞のかざしの其障に。〻〻。兄弟目を引是や限りの親子の契と。思へは涙も盡せぬ名殘。小鹿の狩場に遷參やあらんと。暇申て歸る山の富士野の御狩の折を得て。年來の敵本望を遂んと。樂ひに思ふ嗔恚の焔。胸の煙をふし嵐に。はらして月を清見が關に。終には其名をとめおは兄弟親孝行の例しにおらん。嬉しさよ

兼平

「唯是槿花一日の榮。弓馬の家にすむ月の。わつかに殘る兵の。七騎と成て木曾殿は。此近江路に下り給ふ「兼平瀬田より參り合て。又三百餘騎に成ぬ。「其後合戰度々にて。又主從二騎に討おさる。今は力なし。あの松原に落行て。御腹召れいへと。兼平すいめ申せは。心はろくも主從二騎。あはつの松原さして落給ふ「兼平申樣。うしろより御敵大勢にて追蹤たり。防矢仕らんとて。駒の手綱を返せは。木曾殿御詞ありけるは。多くの敵を遁れしも。汝一

所におらはやの。所存ありつるゆへうとて同さく返し給へは。兼平また申やう。こは口惜き御詞かな。さすかに木曾殿の。人手にかゝり給はんと。末代の御恥辱。たゝ御自害有へし今井も頓て參らんと。兼平に諫められ又ひつかへし落給ふ。扨其後に木曾殿は。こゝろはろくもたゝ一騎。粟津の原のあなたある松原さして落給ふ「こゝろはむつきの末つかた。春めきおから冴かへり。比叡の山風の雲の空もくれはとりあやしや通ひちの。末しら雪の薄氷。深田に馬を駈おとし。ひけともあからすうて。共ゆかぬ望月の駒のかしらも見みは社こは何とならん身の果。詮方もあくあきれはて。この儘自害せはやと。刀に。手を掛給ひしか。去にても兼平か行衛いかにと遠方の跡を見歸り給へは「いつくより來りけん。今ろ命はつき弓の矢ひとつ來つてうちかふとにからりといるかいた手にておしませは。たまりもあへす馬上よりをちこちの土とおる。所は爰そ我より主君の御跡を。先品ひてたひ給へ「實いたはしき物語。兼平の御最期は何とかならせ給ひけ

上シテ「兼ひらはかくう非。しらで戦ふ其隙にも。御最期の御事を心にかくる斗なり。上地「扨其後に思はずも。敵の方に壁立て。シテ「水曾との討れ給ひぬと「地「よは〜る壁を聞しより「今はなにをか期すへきと「地「思ひさためて兼平は「是ろ最期の荒言と「地「鎧ふむはり大音あげシテ「水曾殿の御内に今井の四郎。同兼平と名のりかけて。大勢にわつていれは。本より。一騎當千の秘術をあらはし大勢を。粟津の汀に追つめて磯うつ波の。まくりきり上蜘手十文字に。打破り駈返つて。其後。自害の手本よとて。太刀をくはへつゝさかさまに落てつゐぬかれ失にけり。兼平か最期のしき目をおとろかす有さまなり〜

頼政

シテ「抑。治承の夏の頃。同由おき御謀叛を進め申。名も高倉の宮の中。雲井のよろに有明の月の都を忍ひ出て。下シテ「憂時しもにあふみちや。同三井寺さしておち給ふ。引「クセ「去程に平家は時を廻らさす數万騎のつはものを。關の東に遣はすと。聞や音羽の山にゝく。山科の里近き。木幡の關をよろに見て。と〜ろうき世の旅こゝろ。「宇治の川橋打わたり大和路さして急きしに。上シテ「寺と宇治との間にて。同關路の駒のひまもなく。宮は六度まて御落馬にて煩らはせ給ひけり。是は先の夜御寢ならさるゆへなりとて。平等院にして。暫く御座をかまへつゝ宇治橋の中の間引はなし。したは河なみ。上に立も。共に白旗をなびかしてよそるかたきをまち居。と「同「かくて源平の兵。うち川の南北の岸に打うかみ。時の壁矢さけひの音。浪に類へておひたゝし。下味方には筒井の淨妙一類法師。同橋のゆきけたを隔て戦ふ。橋はひいたり水は高し。下さすか難所の大河なきは。同左右なふ渡すへきやうもあかつゑ處に。下田原の又太郎たゝ綱と名乗て。同宇治川の先陣我なりと。名乗も敢す三百餘騎。同くつはみをろろへ河水に。少しもためらはす。群ゐる村鳥の翅をならふる羽音もかくやと白浪に。さつ〜と打入てうきぬ沈みぬ渡しけり。下シテ「忠綱兵を。下知していはく。同水の逆卷所をは。岩有としるへし。よわき馬をは下手にたて。つよきに水を防かせよ。流れむ武者にはゆはつを取せ。互にちからを合すへしと。たゝ一

人の下知によつて。はかりの大河おれ共一騎もおかれすこなたのきしに。おゑいて上れは味方の勢は我なから踏もためす。半町はかり蹙えすしさつて。切先を揃へて。爰を最期と戦ふたり。去程に入乱れ我も〳〵と戦へは「頼政か頼みつる兄弟の者もうたれけれは「今は何をか期すへきと「只一筋に老武者の「是まてと思ひて〳〵平等院の庭のおもて是なる芝の上に扇を打敷よろひぬきすて座を組てかたおを扳なから。さすか名を得し其身とて埋木の花咲事もなかりしに。身のなる果は。衰なりけり「跡とひ給へ御僧よ。假初なから是とても。他生の種の縁にいま。扇の芝の草の陰に。帰るとてうせにけり立かへるとて失にけり

知章

「主上二位殿を始めたてまつり。おはいとの父子一門皆〳〵船に取乗。海上に浮ふよろはひ。唯さうはのうねにうき沈む水鳥のとし「其中にも親にてい新中納言。我知章監物太郎。御座船をうかゝひ此汀に打いたりしに。敵手しけくかゝりしあひた。又ひつかへし討合程に。知章監物太郎。主従爰にて討死する

「其障に知盛は。二十余町の沖に見ゐたる。おはいとのゝ御船まて。馬をおよかせ追ついて。御船に乗うつりかひなき命扶かり給ふ知盛のときに。おはいとの〳〵御前にて。涙を流しの給ふ。武藏守もうたれぬ監物太郎よりかたも。あの汀にて討るゝをや見捨て是まて参る事。而目もなき次第なりいかなる子は親のため命を惜まぬこゝろやいか成親なれは子の討るゝを見捨けん命はおしき物なりとてさめ〳〵と泣給へは余所の袖も濡にけり。おはいとのもれ給はく武藏守は元來もこゝろも剛にをてよき大將とみしろとて。御子滿むねの方を見やりて御涙を流し給へは船の中につゝなれる人ゝも。鎧の袖をぬらしけり「武藏守知章は生年二八の春なれは。滿むねも同年にて共にわか葉のうなれまつ千代を重ねてさかゆくやつ累葉枝をつらねつゝ。一門かとをおらへしも。こゝしのけふのいかなをは。所も須磨の山櫻。わか木は散ぬ埋木のうきてたゝよふ船人と成行果ろ悲しき

けに痛はしき物語同

しくは御最期を懺悔にかたり給へや　上「實や最期の有樣を。さんさんけに顯はし修羅道の苦患まぬかれん」上地「ろも修羅道のくるしみの。ろの一念も最期より來りしまゝの敵にて上地「すはやよせくる「浦のなみ上同」の旗はこたまたうかや物ゑしといふ盛に。監物太郎か放つ矢に。敵のはたさしの。首の骨のふかに討させて具逆樣にとうとかつれは　下「主人とおはしき武者同ナ〳〵。新中納言を目にかけて。駈よせて討ところを。親をうたせしと。知章駈ふさかつて。むすと組てとうとかちに取て押へて首のさ切て起上る所を又。敵の郎等落合て知章かくひをとれは終に爰にて討をつい。其盛修羅の業に沈むをおもはさるに御僧のと。ふらひは有かたや。是ろ誠の法の友よこれろまことの知章か跡をとひてたひ給へ。名殘惜みのおさかにき。通盛酌を取。さす盃の雫のまもうたゝねなりしむつことは。盛へはもろこしの。項羽高祖の責をうけ。遨行虞氏か涙も是にはいおて增る。へきとも。しひ暗うして。月の光りにさしむかひ。語り慰む處に　上「舍弟の能登守。同はや甲冑をよろひつゝ通盛は何くにろおとおろなはゑ給ふろとよよは〳〵りし其盛の。あら恥かしや能登守。わか弟と。いひおから。他人より猶はつかしや。いとま申てさらはとて。行もゆかれぬ一谷の。所からすまの山のうしろかみろひかるゝ　下「同かくて一谷の合戰破れしかは。但馬守經政もはや討れぬときこゆ　「扨薩摩守忠度の果はいかに　「中「岡部の六彌太。同忠澄と組て討れぬときこゆ天晴通盛も名有侍もかな。討死せんとまつ所に。かすはあれをみよよき敵に　上同近江の國の住人に。

おきうとて。下同むねとれ一もんさしつかはさる。通盛も其隨一たりしか。忍むて我陣に歸り。小宰相の局に向引「既に軍。明日に極りぬ。痛はしや御身は通盛ならて此うちに。頼むへき人なし。我ともかくもなるあらは。都に歸り忘れすは。なき跡とひてたひ給へ。名殘惜みのおさかにき。通盛酌を取。さす盃の雫のまもうたゝねなりしむつことは。盛へはもろこしの。項羽高祖の責をうけ。遨行虞氏か涙も是にはいおて增る。へきとも。しひ暗うして。月の光りにさしむかひ。語り慰む處に　上「舍弟の能登守。同はや甲冑をよろひつゝ通盛は何くにろおとおろなはゑ給ふろとよよは〳〵りし其盛の。あら恥かしや能登守。わか弟と。いひおから。他人より猶はつかしや。いとま申てさらはとて。行もゆかれぬ一谷の。所からすまの山のうしろかみろひかるゝ　下「同かくて一谷の合戰破れしかは。但馬守經政もはや討れぬときこゆ　「扨薩摩守忠度の果はいかに　「中「岡部の六彌太。同忠澄と組て討れぬときこゆ天晴通盛も名有侍もかな。討死せんとまつ所に。かすはあれをみよよき敵に　上同近江の國の住人に。

〳〵。木村の源五重章か鞭を上て駈きたるや通　盛少しも騒かつ。拔まうけたる太刀なれはや甲の。まつかうちようと打返す太刀にて指ちかへとともに修羅道の苦を受る。ヤあはれみをたれ給ひよく吊ひてたひ給へ。讀誦の聲を聞時は。〳〵。惡鬼こゝろを和らけ忍辱慈悲の姿にて。菩薩も爰に來迎すや成就得脫の。身となりゆくろ有難き〳〵

朝長

「むかしは源平左右にして。朝家を守護し奉り御代を治さめ國家を靜ムて。万機のまつり事すあはは成しに。保元平治の世の亂を。いか成時か來りけむ「下シテ「思はさりにし弓馬のさはきをとへに時節到來也「引「クセ去程に嫡子惡源太義平は。石山寺に籠りしを多勢に無勢叶はねはや力おく生捕れて終に誅せられにけりや三男や兵衛の佐をは彌平兵衛か手に渡り是も那へろ捕れけるや。「ワキ義朝は是より。野間の内海に落行長田を頼み給へとやヘ頼む水のもとに雨もりて闇とゝ討れたまひぬやいかなれは長田はゆひかをなくて主君をは。討奉るろやや如何なれは此宿の。あるしはをかも女人のかひ〳〵敷も頼れて。一夜の情のみかや加樣に跡迄もゆ吊ひに成事はやうも〳〵いつの世の契りうやや一切の男子をはや生ゝの父と頼み。萬の女人を生ゝの母と思へとは今身の上にをらをたりやさなから親子のをくにゆ獄きあれは吊ひも。まとに深き心さし請悅ひヤな上ロン中地りや朝長か後生をもゆこゝろ易く思しめせ上ロン中地ウけに頼むへき一乘の。功力なからにあとされは。いまた嗔恚の甲冑のゆ有樣り痛はしき上シテ「梓弓本の身なから玉まはる。魂は善所に趣けとも。魂は修羅道に殘つて。をはし苦しみを受る也「上地「抑修羅の苦患とは。いか成敵にあひ竹の「此世にて見し有さまの地「源平兩家「入乱るゝや上同「旗は白雲紅葉のやちりまし〳〵り戰ふに。ヤハ迎の極めの悲しさは。大崩にて朝長か。をさの口をのふかに射させて馬のや太股に射付らるれは馬は頻にはねわかをは。鐙をこしておりたゝむとやすれとも難義の手なれは一足も引れさりしを。乘かへにかきのせられて。うき近江路をしのきゝて此あふはかに下りしか。雜兵の手にか

〜らむよりはと思ひ定めて腹一文字にかき切て其儘に。修羅道に遠近の土と成ぬる青野か原の。なき跡とひてたひ給へあき跡をとひてたひ給へ

巴

ソキ上歌「露をかたしく草枕。〳〵。日も暮夜にも成しかは。粟津の原の哀れ世の。なきかけいきや吊うはむ〳〵浮シテ上「落花むなしさをしる。流水心ならしてかのつから。すめるこゝろはたらちねの打上上同罪もむくひも因果の苦しみ。今はうかまん法の功力に。草木國土も戊佛なれはいはんや生ある直道の吊らひ彼是何れも頼もしや〳〵。荒有かたや打上不思儀やな粟津か原のくさまくらを。見れは有つる女性成か甲冑を帯するふしきさよ「中々に巴といつし女武者上ワキ女として浄最後に召くせさりし其恨み「執心殘つて今迄も。君遊につかへ申せとも「恨みはなをも「あり上同ろ海の粟津の汀にて。波のうちしに未迄も。浄供申すへかりしを。女として浄最後に。すてられ参らせし恨めしやの身は恩のため。命は義による理り誰かしらま弓とりの身の。最後にのろんてこうめいをも

惜まぬ者やあるト儕も義仲の信濃を出させ給ひしは五萬余騎の御勢くつはみをならへ責上る。となみ山やくりからしはの合戰に於ても。分捕高名の其數誰か宇地面をならへたりにかとる振廻のあき世語りに名をし思め心かなシテ上「されとも時刻の到來同運つき弓のひくかたもなきさによする粟津野の。草の露霜と消給ふ。所は爰ろ御僧連。同所の人あれはしゆゐんにとはせ給へや上ロンキ地扨此原の合戰にて討れ給ひし義仲の最期を語りおはしませ上シテ「比は同月のろらあれは。雪はむらきえに殘るを。たゝ通ひちと汀をさして。駒をしるへに落給ふか。簿氷りのふか田にかけこみ弓手もめても。鎧はしつむてかりたゝん便りもおくて。手綱にすかつて。鞭をうてとも。引方も渚の濱波前後を忘して扣へ給へりとはいかに浅ましやかゝりし處にみつから。眦よせて見たてまつれは。重手は負給ひぬ乗替にめさせ参らせ此松かねに浄供し。はや浄自害ゆら〳〵。巴も供とゆせは。ろのとき義仲の仰には。汝は女なり。忍ふ便も有へし。是なる守り小袖を。木曾に届よ此旨を。

ろむかは主從三世の契り絶はて。おかく不孝を宜へはとも思はともかくも涙にむせふ斗なり（上同）かくて彷前を立上り。見れは敵の大勢あをは巴か女武者あまずなもらすあと敵手をけくかゝれは。今はひく共のかるまし。いて一軍嬉しやと。と も 思少しもさはかす。態かたきを近くおさむと長刀曳ろは発。少し恐るゝけしきなれは。かたきはえたりと切てかゝれは長刀えなかくおつとりのへて。四方を拂ふ八方拂ひ。一所にあたる木の葉返し。嵐もおつるや花の瀧波まくらをたゝむて戰ひけれ。皆一方に切立られて跡もはるかに見ねさりけり跡も遙に見ねさりけり「下シテ」「今は是迄あり〳〵と。（同）立歸り我君を。見奉れは痛はしや。はや彷自害ひひて。此松かねにふし給う御まくらのはとに御小袖。はたの守りを置給ふを。と もあなく〳〵給はりて死骸に御暇申つゝ。行ともかおしや行やらぬ君の名殘をいかにせん。と は思へ共くれ〳〵の。御遺言の悲しきに。粟津の。汀に立寄。上帶切物具こゝろ部に脱おき。おし打もはし同しく。かしこにぬきすて。御小袖を引かつき。其きは迄のはきろへの。小太刀を衣に引隠し。所は爰ろあふみなる。しからきおきを木曾の里になみたとともあはたゝひとり落行しうじろめたさの執心をとひてたひ給へ執心をとひてたひ給へ

蟻通

（上シテ）「されは和歌のをわさは（同）〳〵。神代よりもはしまり。今人倫に遍し誰か是をはめさらん。中にも貫之は。御書所をうけ給はりて。いにしへ今迄の歌の品を撰ひて。よろこひを逃し君か代のすくなる道をあらはせり。凡をもつてみれは歌のこゝろすおはおるは。是もつてねたくしなし。人代にをよんてはなはたおこる風俗。長歌短歌旋頭混本のたくひ是おり。雑、躰、ひとつにあらされは。源流漸くさける木の花のうちのうくひすまた秋の蟬の吟の聲いつれか和歌の數ならぬ。されは今の歌。わかの邪をなさゝれは。おとかは神も納受の。こゝろにかなふ宮人も（上ワキ）「かゝる奇特に逢坂の。（同）せきの清水に影みゆる。月毛の此駒を引たて見をはふしきやな。

ととのと〻に歩み行。越鳥南枝に巣をかけ胡馬北風にいはへたりと歌にやわらく神こゝろは誰か神慮のまとをあふかさるへき「宮人にてましまさは。祝詞をよふて神をすゝしめ給へ」「心得申いて〳〵祝詞を申さんと。神のまらゆふかけまくも「おゝし手向といふ花の「雪をちらして「再拜す「謹上再拜。敬白神司。八人の八乙女。五人の神樂をのこ。雪の袖を返し。しらゆふ花をさゝけ。神慮をすゝしめ奉る。神詫に任せて。なをも神忠をいたさむ。有かたや。抑神慮をすゝしむる事。和歌よりもよろしきはおし。其中にも神樂を奏し乙女の袖。かへす〳〵もおもてしろやな。神の岩戸のいにしへの袖。おもひ出られて「和光同塵は結縁のはし。「八相成道は利物の終「神の代七代「すゝはに人わつらして「精欲わかつことなし「天地ひらけはしまゝしより。舞歌のみちころ。すゝはなれ打上「今貫之か言葉のすゝの。〳〵。妙なる心を感する故に。かりに姿をみゆるゝと。鳥居のゝさきに立かくれ。あれはゝれかと。見しまゝにてかきけすやうに失にけり

つゝらゆきゝ是をよゝこひの。名殘の神樂夜は明て旅立空にたちかへる〳〵

豐于

「人有て借問すれは。隨時の二字を答へて他の語なし。たのしんて。獨鰲を碓舂。則菜炊にこれをゝふ「曾て虎に乘して松門にいれと。をの〳〵衆僧を恐懼する式時豐于適。山行せしにふしきやあ。兒の泣聲を聞しかはたち寄て委く端倪を問ふにしやなうして。孤成と答へヤせは。誠に哀を催し拾ひ得たりとていろ得拾得とかれを名付つい。豐于樣々養育す「かゝりける所にヤ何所より來りけんヤ拾得のとくなる寒山といへる童子さたりヤ常に遊樂の戯れの淺からさりし有樣はヤ喝呵大笑して言語も更に常ならす「其時呂丘といつし人豐于に向ひ國清に今兼學の聖ありもやと問給へは。寒山は文殊あり。拾得は普賢ありと答ふ呂丘此時驚きさわき。須臾に堂に入て是を禮す寒山拾得はヤ何故に今更。我をは禮し給ふりと。問に呂丘は豐于の敷かくりと語れは「二人其時驚きて。にらせんの豐于社則彌陀の化現よと

云捨て閑巖幽嶋のうちに入にけり。まことわ我は古しへの寒山拾得よ疑ふおとこ。いふかと見れは閑巖石根は雲とたちのはり。縫目のくちに入にけり〳〵

「苔の莚に法をのへ。〳〵。有つる告をまたんとて。袖をかたしき臥にけり〳〵」

「一聲の山鳥曙雲の外。虎降供しで松門に入。いかに沙門。汝貴き故によ。忽夢中に豊干向顔をあす。同しく寒山拾得。世上の信たる事を知せんか爲。石の縫目を説法の。佛体顕はし。給ふへし」

「石に精あり水に音あり。虎嘯けは。風は大虚にわたる。像せんせつたる石窟ふたつに割れは普賢文殊顕はれ給ふ。有かたき」

「ふしきやおまのあたりなる御姿を。拜する事の貴さよと。掌を合せて如我昔取願。今者已滿足」

「其時豊干は虎上より。靜に。をりて菩薩にむかひ。迎も姿を顕すうへは。法恩微妙の舞樂をあさんと琴瑟鏡鼓。琵琶箏和琴笙ひちりき。虚空に舞樂を奏しけ。舞樂も今は時過て。〳〵。有明かたの盡ぬ名殘しらむはひかしの山かつら。かゝる奇特は此寺の。佛法王法伽藍長久玉殿成就の其誓願を夢中に見せて。普賢文殊は二羅に上り。豊干はたちまち彌陀と現し。西方遙の雲に乘し。飛行の自在を顕はし給へは菩薩も獅子象にのりのすかた。如來も金色の光りを放つて。紫雲のうちにろいりにける

輪藏

「しかるに此法經にをいて。大唐よりも渡されし傳大士普文普建とて。其身は俗躰なりといへ共。此三人のいかなれは。彼法經に値遇の縁。ふかき心のひまもなく。晝夜に經を。安護し給ふ其後日の本に。渡りし法の舟のうち。波路はるかにとかれきしろ筑紫の果よりも。佛法東漸の都の北の宮寺に「納め給ひしむかしより。今末の世といひなから類ひ稀なる上人の結縁の利益仰さつゝ。衆生を濟度し給へ。我も姿を改て。かならず爰に來りつゝ行道の利益おさんといふかとみゐて。失にけり。〳〵」

「月は隈なき後夜の鐘。聲澄わたる折ふしに」

「ふしきや靈香薫しつゝ。音樂聞ゑ紫雲たな引絶間より。花降くたるゑあらたなる」

「打上いひもゑ〳〵ねは妙經の。〳〵。守護神の厨子のとひらは忽ち四方へひら

けて。傳大士二童子。顯はれたり打上「釋迦一代の
の法華經を彼上人にと〳〵く與んと。普文景建
の二童子にもたせ上人の沙前にさし置たまへは。「傳
大士座を立て。同〳〵竹杖にすがり。膝をかゝめて上
人を禮し。彼沙經を誦誦し給へは善哉あれや。善哉
なれと夜遊を奏して舞給ふ打上何れも妙成舞の袖
〳〵。月も照ろふ雲間より。天部の姿は隱れもあく
天降るこう有難けれ上火天「抑是は。釋迦一の代藏經
の守護神。十二天の其中に。火天の姿を。顯はすなり引
上同火天忽ち天降り。か〳〵。ほとなく目前に顯れ出て
上人に向ひ則組絲の遶堂の利やく。廻らし給へと
おの〳〵立より上人を誘ひ。輪藏に沙手を掛まくも
かたしけおしと樂ひに押めくり。廻り光くるや日月
の光り曇らぬ沙法の。あらたさよ下火天打上是はこれ妙經
の守護神なれは。同〳〵。夜の間に轉經の儀式を顯は
し。上人と〳〵く披見の。其後各沙宮を取々
に。遙の神前に運ひ給ふ。傳大士伴ふ神前に積置い
よ〳〵當社。當寺の佛法繁昌の靈地を。崇め給へと
上人にをしへ。天部は雲非に上らせ給へは。七寶莊嚴

の瑠璃の座の上に。傳大士二人の童子を伴ひ〳〵。歸
り給ふ有かたき

一角仙人

上シテ「ゆうへの月の盃を。同うくる其身も仙人の。をる
ろて句ふ菊の露。うちはらふにも。下千世は經ぬへき契
りはけふ始なる下ツレ「而白やさかつきの。下同中〳〵。廻る
光りも照ろふや。紅葉重ねのたもとを吉にひるか
へす。飜す。舞樂の曲ろ而しろきを打上同糸竹の調
取〳〵に。引〳〵。さす盃も度々めくれは夫人の情
にといろをうつし。仙人は次第に足弱車の廻るもた
よふ舞のたもとをかたしきふせは。夫人は悅ひ官人を
引つれはる〳〵なり之山路をしのき。帝都に歸らせ
給ひけり上地「かゝりけれは岩屋のうちしきりに鳴動
して。天地も響く。はかりなり上シテ「荒ましきま思は
すも。人の情のさかつきに。醉ふしたりし其隙に。龍
神を封しこめおきし。岩窟の俄に鳴動するは。何のゆ
へにて有やらん上龍「いかにや如何に一角仙人。人間にま
しはり心を惱す。無明の酒に醉ふして。通力を失ふ天
罰の。むくひの程を思ひしれ打上同山風あらく吹落て。引

く。ろらかき蠱り。岩窟も俄にゆるくと見ゑし磐石四方に破れくだけて。諸龍の姿は。顯れたり（下シテ打上）其時仙人驚きさわぎ。（下同）く。利劍をかつとり立向へは。龍王は嗔恚の甲冑を帶し。邪見のつるぎのはさきをろろへ。一時かはとは戰ひけるか。仙人神通のちからもつきて。次第によはり倒れふせむ。龍王よろこひ雲をうかち。雷電稻妻天地にみちて。大雨をふらし。洪水を出して立白波に飛うつり。たつ白浪に飛うつつて又龍宮にろ歸りける

鉄輪

（下シテ）「大小の神祇（同）諸佛菩薩。明王（下）部天童部九曜七星。二十八しゆくをおとろかし奉り祈れはふしきや雨降風落神鳴稻妻しきりにみちく（沒）骸もさゝめき鳴動して身の毛よたつて。おろろしや（上）「夫花は斜脚の暖風にひらけて。同しく暮春の風にちり。月は東山より出て早く西嶽に隱をぬ。（下）世上の無常かくのことし。因果は車輪のめくるかことく。われにうかりし人々に。忽ちむくひを見すへき也。（上）戀の身の。うかふ世もおき。加茂川に（上地）「沈みしは水の。青き鬼さ

（上地）「我はきふねの河瀬の螢火「かうへにいたく鐵輪のあしの「ほのほの赤き鬼と成て（上同）「臥たる男のさくらに寄ろひ如何にるのとよ。珍らしや打上「恨めしや沒身と契りし其時は。玉椿の八千代。二葉の松のすゑのけて。かはらしと社思ひしに。おとゝも捨は果給ふろや。わら恨めしやすてられて（下同）捨られて思ふ思ひの涙に沈み。人をうらみ（下シテ）「妻をかこち（上同）「或時は戀しく（下シテ）「又は恨めしく（上同）起てもねても忘れぬ思ひの因果は今ろと白雪の消なん命はとよひろ。いたはしや（上）打上あしかれ。と思はぬ山の嶺にたに。く。人のおけきはかはなるにいはんやとし月思ひに沉み恨みの數。つもつて執心の。鬼とおるも理りや（下シテ）「いて〳〵命をとらん（同）〳〵と云もと振あけうはおりの髮を手にからまいて。打やうにの山の。夢現共わかさる浮世に。因果は廻りあひたり今更どころ。悔しかるらめ扨こりや思ひしれ殊更うらめしき（下同）〳〵。あたし男をとにてゆかんとふしたる枕に立より見れは。恐ろしやみてくらに。三十番神まし〳〵て。魍魎鬼神はけからはしや出よ

〻と責給ふろやはらたちやおもふ妻をはとらてあまさへ神々の。責をかうむる惡鬼の神通つう力自在の勢ひ絶て。力もたよ〳〵と。足弱車の廻り逢へき。時節を待へしや。先此度はかゑるへしと。いふ聲はかりはさたかにきこゑ。いふ聲はかり聞ゑてすかたは。目に見ゑぬ鬼とろ成にけるめにみゑぬおにとおりにけり

葵上

中吟「唯いつとおき我心。ものうき野邊の早蕨の。もえ出ろめし思ひの露。かゝる恨みをはらさんとて。是迄顯はれ出たる　なりおもひしらすや世の中の情は人のためならす　上歌同「我人の爲つらはれは〳〵かならす身にもむくふなり。何を歎くそ葛の葉のうらみはさらに盡すまじ〳〵　下「荒　恨めしや。今はうたては叶ひはまし　上「あら淺ましや六條の。御息所程の御身にて。うはなり打のはふるまひ。いかてさる事れ候へき。唯思し召留り給へ　「いや如何にいふとも。今はうたては叶ふましと枕に立寄ちやうとうてはこれかん此上はとて立よりて。袖は跡にて苦を見する　上「今の怨は有し報ひ　「嗔恚のほむらは　「身をこかす　「おもひ焦らすや　「思ひしれ　上同「恨めしのこゝろや荒らめしのこゝろや。人の恨みの深くして。うきねに泣せ給ふ共。いきて此世にましまさは。水暗き澤邊の螢の陰よりも光る君とろ契らむ　下「袖は遂生の。同もとあらさりし身と成て。葉末の露と消もせは。うれさへことにうらめしや。夢にたにかへらぬ物をわか契り。むかし語りに成ぬれは。猶も思ひは增かゝみ。其面かけもなつかしや。まくらにたてるやを車打のせかくれゆかふよ〳〵　上「行者は加持に參らんと。役の行者の跡を繼。胎金兩部の峯をわけ。七寶の露を拂ひし篠掛に。同不淨を隔つる忍辱の袈裟。あか木の珠數のいらたかを。さらり〳〵と押もむて。上「一祈ころ祈つたれ。東方に降三無明王。降伏三世明王。南方軍荼梨夜叉。西方大威德明王。北方金剛夜叉明王。「中央大聖。不動明王。「中央大聖。不動明王。「中央大聖。不動明王。

囀曰羅敷。捷阿摩河嚕遮那。娑婆多耶吽多羅吒于鑁。聽我說者得大智惠。者我心者即身成佛「あら〳〵恐ろしの般若こゑや」「是までは怨靈此のち又も來るまし」「誦經の聲を聞ときは。〳〵。惡鬼心を和らけ。忍辱慈悲のすがたにて菩薩もこゝに來迎す。成佛得脫の。身となり行ろ有難き〳〵

黒塚

上ワキ「恐ろしやかゝるうきめを陸奥の。足達原れ黒つかに。鬼こもれりと詠しけん。歌の心もかゝやらんと」上歌二人心もまとひきもをけし。〳〵。行へきかたはしらねとも。足に任せて逝てゆく〳〵「いかに客僧」上「とまれところ。去にてもかくし置たる閨の中を。あさまになされ申つる。恨の爲に來りたり。上胸をこかすはのはは。感陽宮のけふり。ふん〳〵たり「引上地「野風山かせ吹おちて「鳴神稻妻天地に滿て「空かき曇る雨の夜の「鬼一口に喰むとて「歩みよるあし音「振上る、鎖杖のいきほひ「あたりをはらつておろろしや打上「東方に降三世明王「南方に軍吒利夜叉明王「西方に大威德明王「北方に金剛夜叉明王「中央に大日大聖不動明王。二人下ゝ唵呼嚕呼嚕唵掟茶利摩登枳。唵阿昆羅吽欠婆婆呵。吽多羅吒于鑁。上同見我身者發菩提心。〳〵聞我名者斷惡修善。聽我說者得大智惠。智我身者即身成佛。即身成佛と明王の。けはくにかけて。責かけさをかけ。いのりふせにけり扨こりよ。「今迄はさしもけ下同に。〳〵いかをなをつる男女おるかた。ちまちによはり果て。天地に身をつゝめまなこくらみて足もとはよろ〳〵と。たゝよひ廻る安達か原の。黒塚に隱れ住しもあさまになりぬ。淺ましやはつかしの我姿やと。いふ聲は猶物冷しく。云聲はなをすさましき夜あらしの音に立紛れうせにけりをとに立まきを失にけり

鞍馬天狗

上シテ「松嵐花の跡とひて。同〳〵。雪と降雨となる。哀猿雲に叫むては。腸をたつとかや心すこの景色や。夕を殘す花のあたり。鐘は聞にてよう遇き。奥は鞍馬の山道の。花ろ知へおる此方へ入せ給へやゆ扨も此程供して見せ申つる名所の。有時はあたこ高雄の初櫻。ひらや横川の遥さくらよし野はつせ

の名所を。見殘すかたゞあらはこそ。上子方「さるにても如何なる人にましませは。我を慰め給ふ覽沙名を名乘おはしませ上シテ「今は何をかつゝむへき我此山にとし經たる。大天狗はわれなり上同君源の棟梁にて兵法を授け奉り平家をうたせ申さん爲。をも思し召れは。明日參會すへしさらはと云て客僧は。大僧正か谷をわけて雲をふんてとんてゆく立くもを踏てとんてゆく浮子方上「扨も沙那王か出立には。はたには薄花さくらのひとへに。絹紋紗の直垂の。露を結んて肩にかけ。白糸の腹まき白柄の長刀上地「喩へは天魔鬼神おりとも。さこそ嵐の山さくらはなやなりける出たちかな浮シテ上「抑。是は鞍馬の奥僧正か谷に。とし經てすゑる。大天狗なり引上地「先沙供の天狗は。たれ〳〵ろつくしにはヤ「彦山の豐前坊上地「四州にはヤ「白峯の。相摸坊。大山の伯耆坊上地「いつゝの三郎富士太郎。大峰の善鬼か一黨かつらき高間。余所まてもあるまし。遙土にをいては「比良上地「横川「如意か嶽「我慢高雄の峯にすむて。人の爲にはあたと山。霞とたなひき雲となにて月は鞍馬の僧正か上地「谷にみ

ち〳〵峯を動かし。嵐こからし瀧の音。天狗たをしはおひたゝしや引シテ同「いかに沙那王殿。只今小天狗を參らせて候に。稽古のきはをわなんはう沙見せいろ子方同「さんは唯今小天狗とも來り候程に。うす手をも切付。稽古のきはをも見せヤたくはいひつれ共。師匠にやしかられヤさんと思ひと〳〵まりていひシテ「あゝゆゝしゝ〳〵。去物語のは語て聞せヤへし。昔漢の高祖の臣下張良と云者。黃石公に此一大事を相傳す。有時馬上にて行會たりしに。何とかしたりけん左の履を落し。いかに張良。あの沓とつてはかせよといふ。安からすは思ひしか共履を取てはかす。又其後以前のとく馬上にて行會たりしに今度は。ひたりみきりの沓を一度に落し。やあいかに張良。あの沓とつてはかせよといふ。猶安からす。同思ひしかとも。よし〳〵此一大事を相傳する上はと思ひ。上落たる沓をかつ取て。同張良くつを捧けつゝ。〳〵。馬のうへなる石公に。はかせけるにろ心。上とけ。兵法の奥義をつたへける下シテヤ「其如くには上龍も同ヤ〳〵。さも花やか成沙有樣にて姿もこゝろもあら天狗を。師匠や坊主と御賞翫は。いかにも大事をのと

さす傳へて平家を討んと思し召かややさしのこゝろさしやな。「上」ろも〳〵武留のはまをの道打上明上同抑武略の譽れの道。源平藤橘四家にもとり分彼家の水上は清和天皇の後胤として。荒々時節を考へ來るに驕れる平家を西海におつくたし遠波滄波の浮雲に飛行の自在を受て。のたきをたいらけ會稽をすゝかんに身と守るへし是迄なりや。暇やして立歸れはうし若狹にすかり給へは實名殘あり。西海四海の合戰といふとも影身を離れす弓矢の力をうへ守るへし。たのめや頼めと夕かけ閑き。頼めやたのめと夕かけ鞍馬の木すへにかけつて。うせにけり

車　僧

上「見聞人こゝろ空ある雲水の。同〳〵。ふかたつろらも冷しくやあらしも聲々にあたこ山。墨とよむ迄響合て。車路はあけれとも。我すむ方はあたこ山。太郎坊か菴室に。入あれや車僧とよはは。夕山の黒雲に乘てあかりけり〳〵。「愛宕山。樒か原に雪積り。茫摘人の跡たにもなし。實雪中に山路あし。扨車輪はいかに車僧。我はと尋き者あらしと。傍心の心路あとあか覽や。然らは無着法欲心に。引か移るか車僧。魔道にも。こゝろをよせよくるま僧「上地善惡ふたつは両輪のことし。「佛法あれは世法あり。「地煩惱あれは。菩たいあり。「引佛あれは衆生もあり。車僧あれは下「太郎坊の。行者もあり。「上同打上祈らはいのるへし行せは行德も。おとるましとよ〳〵いさくらま僧行競せむ「如何に汝さまたくる共。それにはよらし爭はし。我は元より不增不減。荒面白の時節やあ「實おもしろき時節ならは。雪中に車を廻らし。さか野〻原にていさ遊はん「遊は〻遊へ糸ゆふの我心をはひかれめや「なとかはひかて有へきと。しもつを振上車をうつ「わふ車をうたは行へまと。牛をうたは行へしや「實に車は心なし。牛をうたむもあらはとろ「愚や汝仁牛の道。「見ねたるうしをはなとうたぬ「見えたる牛とはさていかにろも仁牛は「うつともゆかし「さてお僧のうたは行へきか「中々の事。いて〳〵さらは露地の白牛をうつて見せんと。「上かん抑子をあけて虛空をうては「上同ふしきやお此車の。〳〵。ゆるき廻りて今迄は。足よわ事と見えつるか。うしもなく人もひかぬ

にやすくとやりかけてとふ車。とろ成たりける

「小車の山の陰の〜道すがら。法の道のへ遊行して。貴賤の利やくおすとかや

「所から爰はうき世のさかおれや。雪のふる道跡深き。くるまのわたちは足曳の。大雪にはよも遊かし

「實雪山の道なりと法の車路たからかに「ゆくかゆかぬか此原の「草の小車雨ろへて「うて共ゆかす「とむれはすゝむ此山の法のちからとて嵯峨小倉大井嵐の山河を飛かけつて。せんまくすれともさわかはころまとに奇特の車僧かなあら貴や恐ろしやと。魔障を和られ。大天狗は合掌してころ失にけれ

張良

「有明の月も暇なき深更に。〜山のかひより見渡せは。所は下邳の川浪に。わたせる橋におくしもの白きをみれは今朝はまた。渡りし人の跡もあし。嬉しや今はやはや。思ふ願ひもみつ盃のあかつきかけてはるかに。夜馬に鞭うつ人影の。駒をはやむる景色あり

「抑是は黄石公いふ。老人あり。爰に漢高祖の臣下張良と云者。たゝ公程を見て君臣をおもんし義を全うして心猛く。賢才人にこえ。器量勝れ「國を治めん民をあはれむ心をし

「天道に通し。忽に「諸佛も感應まのあたり

「大事をつたへて高祖につかへ。たきを平らけ味方をいさめて天下を治めん謀事。汝に傳へんと駒をはやめて來り給ふを張良はるかに見奉れは有しに替れる石公の粧ひ。眼の光りもあたりを拂ひ。姿もかゝやく威勢に恐れて。橋本にかしこまり。待居たり「いかに張良。いしくもはやく來りたり。近付給へものいはん

「其時張良立あかり。衣冠正しく引繕ひ。士橋を遙に上りゆけは

「天晴器量の人躰のなと。おもひなからも今一度。こゝろを見んと石公は「はいたる沓を馬上より。〜。遙の川に落し給へは張良つゝいて飛てかり。流るゝくつをとらむとすれとも所は下邳の撥石いはほに足もたまらす早き瀬の。矢を射ることく落くる水に。うきぬしつみぬ流るゝ沓を取へきやうころなかりけれ「打上ふしきや川浪立歸り「打上不思儀や川浪立歸り。俄に川霧たちくらかつて。浪間に出る蛇たいのいきはひくをあゐの舌をふりたてゝ張良を

めかけてかゝりけるか。沈る〳〵沓をかつ取あけて面もふらすかゝりけり打上張良驚かすつるぎを抜もち同〳〵蛇躰にかゝれは。大蛇はつるぎの光りにおろれ。持たる沓をさしいたせは。沓を追とり劔を納め。又川岸にねいやとあかり。偖彼沓を取出し。石公にはかせ奉れは「石公馬より静におりたち下同〳〵。去にても汝。善哉〳〵な彼一巻を取出し。張良にあたへ給ひしかは。則披き。こと〳〵く拜見し秘曲口傳を殘さすつたへ。扨彼大地は観音の再誕なむちかこいろを見む爲なれは。今より後は。守護神と成へしと大蛇は雲非に磐上れは。石公はるかれ高山にあかり。金色の光りを虚空にはなし。たちまち姿を黄石と顯はし。殘し給ふろ有難き

項羽

ワキ上歌「様々にとふらふ法の聲立て。〳〵。波にうきねのよるとあく聲ともわかぬ吊ひの。槃若の船にかのつから。其ともつれをとゝ法の。こゝろをしつめ聲をあけ。引一切有情。殺害三界不墮悪趣「浮シテ上「昔は月卿雲客にうちかこみ。今は樵歌野田の月。爛休霧深し古松下のかけ「上地「苔紛々として舊銘を埋む「シテ「紫のくも間横ぎる出たちは。上地「天津乙女の。しら「引「上同「打上をの〳〵妓樂を奏しつ〳〵。引夢のつけくし彈琴琵琶の。四面に聞の聲をあくれは又執心の貴來るろや荒「下ツレ「下同「苦しの苦患やな打上「虞氏はおもひに堪かねて。下同「くしは思ひに堪かね給ひて高樓にのぼりて落るはさなから涙の雨の。身を投空しく成給へは打上「頂羽は虞氏に別れと我身の。上同成ゆく草葉の露もろ共に。消果し悲しさ。思ひ出れは劔も鋒も皆投すてゝ。身をたくはかれに口惜かりし「夢物語ろ。哀なる打上「下シテ「あはれ苦しきしんいのほのほ下同哀苦しきしんいのほのほの立あかりつゝ。味方を見れは。高祖に圍してよせ來る波の。あらき聲々きけは腹立いて物見せんとみつから駈出敵をちかつけ取ては投すて。又は引ふせぬち首取とりに恐ろしかりけるいきはひなれとも運つきぬれは「烏江の野邊の。土中の「塵とう成にける

雷電

上シテ「秋にをくるゝ老葉は風あきに散安く「憂をとふらふ涙はとはさるにまつかつ下シテ「されは貴きは師弟

の約　「切なるは主從　「むつましきは親子の契り
なり。二人是を三ていと云とかな　「中にも眞實心さしの
ふかき事は。師弟三世にしくはなし　同　孫しや師の影
影をはいかてふむへき　幼かりし當時は父もあ
く。母もあく行衛もしらぬ身おかりしを。嘗相公の養
に親子の契りいつの間に。有明月のをはろけに。
憐み育給ふ事まことの親のとくなり。扨勸學の室
にいり僧正を頼み奉る。風月の窓に月を招き。盞を聚
め夏むしのこゝろの月もあきらかに。「筆のはや
しも枝しけり。同　言葉のいつみつきもせす。文筆の堪
能上人もよろこひ思し召。あらき風にもあてしと。
心さしの今迄も。一字千金なりいかてか忘ヤ
へき　「我此世にて望は叶はす。死しての後梵天帝釋
に侍憐みを裝り。鳴雷とおつて内裏に飛入。我にうか
りし雲客を蹴ころすへし。其時僧正を召れいへし。か
まへて侍參いな　「たとひ宣旨は有といふ共。一二度迄
は參るまし　「いや一二度までは叶ふまし。勅使たひ
〳〵重る共。かまへて參り給ふなよ　「王土に住る此身
なれは。勅使三度に及ふならは。いかてか參内ヤささ

らん　「其時丞相すかた俄にかはり鬼のとし　「折ふ
し本尊の侍前に。柘榴を手向置けるを　同　おつとつて
かみくたきやく〳〵。妻戸にくわつとはきかけたまへ
は柘榴たちまち火煙となつて戸ひらにくわとろもゑ
あかる。僧正は覺して。さわくけしきもましますす
。酒水の印を結んて。はむしのみやうを唱へ給へは。火
煙はきゆるけふりのうちに。立かくれ丞相は。行衛
もしらす。失たまふ行衛もしらす失給ふ　「さても
僧正は紫震殿に座し。珠數さらさらとおとなんて。普
門品を唱へけれは　同　さしも黑雲咲ふさかり。闇の夜の
とく成内裏。俄に晴てめい〳〵とあり　「されはこう
何程の事の有へきやと。由斷しけるところにふしき
や虛空に黑雲かはひ。〳〵いおつま四方にひらめき
渡つて。たいりは紅蓮の闇のことく山も崩れ内裏は
虛空にさか昇るかと。震動ひまなく鳴神の雷の
姿は顯れたり　「其時僧正いかつちに向つてヤ樣。卒
土四海のうちは王土に非といふ事なし。況菅丞相昨日
迄は。君恩を蒙る臣下ろかし。内愚外忠の禮儀未斷る
りしにまり給へ。荒けしからすやい　「あら愚や僧正

よ。我を見放し給ふうへは。僧正なり共恐るまし。我にうかりし雲客に（上同）思ひしらせん人ひとよ〳〵とて。小龍をひきつれて。黒雲に打乗て。たいりの四方を鳴まわれば。稲光り稲妻の。電光しきりにひらめき渡つて玉躰危く見なせ給ふかふしきや僧正のおはする所をいかつち恐れてならさりけるとろ奇特なれ。紫震殿に僧正あれば。弘徽殿に神鳴するとうき殿に移り給へは清涼殿にいかつちおる。清涼殿にうつるとたまへはあしつは梅壺に畫の間よるのおとゝを。行遊ひめくりあひて。我おとらしと祈るは僧正あるはいかつちもみあひ〳〵追駈〳〵樂ひの勢ひたとへんかたなく恐ろしかりける有様かな手手泡羅尾をみて給へは。神鳴の霊にもとらへす。あら海の障子を隔て。是迄ありやゆるしたまへ。開法秘密の法咏に預り侍門は天満大自在天神と贈官を。菅丞相に下されけれは嬉しや生ての怨み死しての恨ひ是迄なりや。是まてとて。黒雲に打のりて虚空にあからせ給ひけり

羅生門

（上ワキ地）「綱はしるしを給はりて。〳〵。侍前を立て出けるかや立歸り旁々は。人の心を陸奥の。安達か原にあらね共。こもをる鬼をしたかへすは。二度また人に。面をむくる事あらし。是まてなりといふしほの、引はかへさしものゝふの。やたけこゝろ。おろろしき〳〵（浮ワキ上）「扨も渡邊の綱は。唯かりろ先の口論によて。鬼神の姿を見んために。物の具をつて肩にかけ。おなしけの甲の緒をしめ。重代の太刀をはき（上地）一たけある馬に打乗て。舎人をもつれすた〳〵一騎。宿所を出て二條大宮を。南かしらにあゆませけり（上同）（打上）春雨の音もしきりに更る夜の。〳〵。鐘も聞ゆる曉に。東寺の前を打すぎ。九條おもてにうつて出。羅物門を見渡せは。物冷しく雨落て。俄に吹くる風の音に。駒もすゝます高いあゝきし身振ひして社立たりけれ（上同）其時馬を乗はなれし〳〵。羅城門の石壇にあかり。印の札を取出し。壇上にたて畳歸らんとするに。うしろより甲の鍬をつかむて引とめけれは。すはや鬼神と太刀ぬきもつて。きらんとするに。取たる甲の緒をひきちきつて。覺えす壇より飛おりたり。かくて鬼神はぬりをな

して。（引）〳〵。持たる甲をかつはと投すて其たけかうもんの軒にひとしく兩眼月日のをくにて綱をにらんで立たりけり（下ワキ打上）綱はさわかす太刀さしかさし。（下同）〳〵。汝しらずや王位をかかす。ろの天罰は。のかるまじとてかゝりければ。鐵杖を振上ゑいやと打を飛ちかひちようとさるきられて組つくを。拂ふ劔にうて打おとされひるむと見ふしかわきつちにのほり。虛空をさして。あかりけるを。したひゆけ共黑雲かほひ。時節をまちて。又取へしと。よはるゝ聲もかすかに聞ゆる鬼かみよりもをろしかりし。綱は名をころあけにけれ

大江山

（シテ）「憐みたまへ神たにも（上同）一ちて（より）三山王をたて給ふはかかみをさくるよしろかし（さま）身は客僧我は童形の見なれはおとか憐み給はさらん。かまひて余所にて物語させ給ふな（上同）陸奥の安達か原の塚にころ〳〵。鬼籠れりと聞し物を。まとなり誠なり爰は名をえし大江山。いく野の道は猶遠し。天の橋立よさの海。大山の天狗も。我にしたしき友ろと知しめされよ。いさ〳〵酒を呑ふよ〳〵。扨おさかなは何々ろ比しも秋の山草桔梗かる萱われもかう紫苑といふはなにやらん。鬼のしこくさとはたれかつけし名なるろ（上シテ）「實まことと（同）〳〵。丹後丹波の境なる。おにか城も程近し。頼もしたのもしや。呑酒は數ろひぬ。面も色付かゝ赤きは酒の科ろ鬼となる思しろよ。恐れ給はて我に馴々給はゝ。興かる友と思しめせ。我も其方の姿ろ見にはゝ〳〵。恐ろしけなれと。馴てつはひは山（片地）ふし。猶々廻るさかつきの。度重れは有明の。天も花にゑゝりや。足もとはよろ〳〵と。たゝよふかいさよふか。雲折敷て其儘。めに見えぬ鬼の間にいり。あら海の障子おし明て。夜るのふしとに入にけり〳〵（上ウキ）「既に此夜も更方の。空なを闇き鬼の城。鐵の戸ひらを押ひらき。見れはふしきや今まては。人のかたちと見いつるか（上同）其長二丈はかりなる。〳〵。鬼神の粧ひ眠れるたにもいきほひのわたりをはらふ氣色かな。兼て期したる事なれは。迎命は君のたゆ。又は神國氏やしろ。南無や八幡山王權現我らにちからをろへ給へと願光保正綱公時定光季武

ひとり武者。心をひとつにして。まとろみ臥たる鬼の上に。つるぎを飛する光りのかけ。稲妻震動おびたゝし。「情なしとよ客僧達。偽りあらしと云つるに。上がん「鬼神に横道おきものを」「何鬼神に横道おしとや」「中〳〵の事」「あら虚言やなとさらは。王地に住て人をとり。世のをまたけとは成けるろ。我をは音にもきゝつらん。保正かたちに獨り武者。おに神あるとも遊すまし。ましてや是は勅おれは土も木も。我大君の國なれは。いつくか鬼の。宿り成らん「餘すなもらすな責よや責よ人々とて。きつ先を揃へて切てかゝる打上山河草木震動して。光りみちくる鬼のまなこ。たゝ日月の天津星。照かゝやきてさなから面をむくへき樣ろおき打上「頼光保正本よりも鬼神成ともさすかよりみつか手並にいかてかもらすへきと。えしりかゝつてはつたと打手にむんすと組て。ねいやゝと組とろ見えしかよりみつ下にくみふせられて。鬼一口に喰んとするを指通しさし返しかたなを力にねいやとかへし。いかなる鬼の首うちおとし。大江の山を又踏分て。都へとて社歸りけれ

夜討曾我

「今當代の弓取の。親とは是を名付たり。下同然れは我等か賤しき身を。喩ふへきにはあらねとも。恩愛の契りの哀れさは。我等を隔てぬ習ひなりけり去程に兄弟。文こまゝとかき收めけん是は祐成か今はの時に書ふみの文字消て薄く共。筐みに浄覽ひへ。皆人の形見には手跡に增る物あらし。水莖の跡をは心に懸て問給へ。老少不定と聞時は。若き命も頼まれす老たるも殘る世の習ひ。飛花落葉のをわりと思し召れよ。其とき時宗も。肌の守りを取出し。是は時宗か形見に浄覽ひへ。筐は人のなき跡の。思ひの種とやせ共。責て慰む習ひおをは。時宗は母上にろひやたると思し召せ。今迄は其ぬしを。守り佛の觀世音。此世の緣おくと來世をは助け給へや上シテ「既に此日も入相の同鐘もはや聲々に諸行無常と告渡る。さらはよいろけ急き使なみたを文に卷こめて其儘やる文のひぬ間にと。詠せし人のこゝろ迄。今更思ひ白雲の。かゝるや富士の裾野より。曾我にかへきは兄弟すと〳〵と跡を見送りて

泣てとゝまる。哀れさよ〳〵（一セイ）寄受て。打白波のを
と高く。ときを作つて。騒きけり（引ノ浮シテ同）「荒夥しの軍
兵やな。我等兄弟討んとて多くの勢は騒きあひ。爰を
先途と見えたるうや。十郎殿〳〵。何迚（ゆ）返事はおき
ろ十郎殿。宵に新田の四郎と戰ひ給ひしか。扨は早討
れ給ひしよな。口惜や死は一所と社思ひしに。物思ふ
春の花盛。散々になつて爰やかしこに。屍を晒す無念
さよ（上同）打上ル味方の勢は是をみて。〳〵。打物の滴えく
つろけ時宗を目掛てかゝりけり（上シテ）「荒はか〳〵しや
おのれうよ。（同）〳〵。先に手並は知らん物をと太刀取
直し。立たる氣色畏ぬ人ころあかりけれかゝりける所
に。〳〵。（ゆ）内方の古屋五郎（ヤケ）樊噲か怒りをあし
張良か秘術を盡しつゝ。五郎（ヤケ）かおもてに切てかゝ
る。時宗も古屋五郎か拔たる太刀のしのきを削り。
しはしかはとは戰ひしか。何とか切けん古屋五郎は二
つに成てゝ見なたりける。かゝりける所に〳〵（ゆ）所
の五郎丸（ゆ）前に入たて叶はし物をと肌には鎧の
袖をときき。草摺かろけにさつくと投かけ上には薄衣
引かつき唐戸の脇にゝ待るたる（打上ル）今は時宗も遲つ

き弓の。〳〵（同）ちからも落て。誠の女ろと由斷し
て返るを。遣過し押ならべむんすと組は（上シテ）「おの
れは何者ろ（同）（ゆ）所の五郎丸荒物々しとわた髪抓むて
ゐいや〳〵と組ころんで。時宗上に成ける所を下
より えいやと又押かへし其時大勢折重つて。千筋の繩
を掛まくもかたしけなくも君の（ゆ）前に。引立行ころ
めてたけれ。

橋辨慶

（上ノ方）「扨も牛若は。母の仰の重けれは。明なは寺に登る
へし。今宵斗の名殘ろと。川浪ろへて忽に。月の光り
を待へしと（一セイ地）「夕雲の。行衛はいつく夜あらしの。聲
澄渡る。秋の暮（上歌同）打上ル面白のけしきやあ〳〵。ろ
ろきたつ我とゝろ浪も玉ちる白霜の。夕顔の花の
色。五條のはしの橋板を。とゝろとゝろと踏おら
し。風冷しく更る夜に。通る人をろ待居たる〳〵
（シテ同）「既に夜をまつ時も來て。山塔の鐘もすきまの月の
着たる鎧は黒革の。おとしにおとせる大よろひ。草摺
おかにきなしにゝ。元來好む大長刀。具中とつて打か
つき。ゆらり〳〵と出たる粧ひ。いか成天魔鬼神成共

おもてを向へきやうあらしと。我身なからも物頼しう。「手にたつかたきの。戀しさよ」上子方「川かせも早更過る橋の面に。詞通る人もなきうとて心すこけに休らへは。シテ詞「辨慶かく共白波の。打つれ渡る橋の上。さもあら〳〵かにとう〳〵と踏おらし。こ〳〵うすこけに過てゆく」子方詞「牛若かれを見るよりも。すはや嬉しや人來ると。薄衣猶もひきかつき。傍によりろひた〳〵すめはシテ詞「辨慶かれを見付つゝ。言葉をかけんと思へ共。みれは女の姿なり。我は出家の中おれは。おもな頻らひ過て行」子方「牛若かれをなふつて見んと。行ちかひさまに長刀の。柄本をはつたと蹴たくれは。シテ「すは。しれものよ物見せんと」上同「長刀驕て取なはし。か〳〵。いてもの見せん手なみの程と。切てか〳〵れは牛若は。少も騒かすつつたち直つて。薄衣引のけつ〳〵。やしつしつと太刀ぬきはおつて。つ〳〵さ〳〵へたる長刀の。きつ先に太刀打合せ詰つひらいつ戰ひしか。何とか片地したりけん。手元に牛若よるをう見ねしかた〳〵み重ねて打太刀に。さしもの辨應合せかねて。橋桁を二三間しさつて肝をけしたりけり。荒物々しやあれはとの。〳〵。小薙

ひとりをされはとて。手並にいかてもらすへきと。なきおた柄長く追取延く走りかゝつてちようときれは。背けて右に飛違ふ取直して裙をおき拂へは。をとり上つて足もためす。中をはらへはかうへを地につけ千々に戰ふ大長刀。打落されてちからおく組んとすれは。切拂ふすからんとするに便なし。詮かたおくて辨慶は。きたいなる少人哉とてあきれ果てろ立たりける。上ロンキ地ふしきや御身たれなれは。またいとけおき御身こて。か程けなけにましますろ委しくなのりおはしませ。上子方「今は何をかつゝむへき。我はみなもと牛若」地「義朝の御子か」子方「偖汝は」地「西塔の武藏辨慶なりと。樂ひに名乘あひ。シテ〳〵。限參申さん御免あれ少人の御事成は出家。位も氏もけなけさも。よき主おれは頼むへしやゝ。卒忽にやおはし召らん去おから。是また三世の機緣のはしめ。今より後は主從ろと。契約かたく申つゝ。薄衣かつかけ「奉り」シテ「辨慶は長刀打かついて。九條の御所へろ參ける

船辨慶

傳聞陶朱公は勾踏を伴おい。同會稽山に籠りゐて。

種々の知略をめぐらし。終に呉王を亡ぼして。勾踐の本意を。達すとか。やしかるに勾踐は二度世をとり會稽恥をすゝきしも。陶朱公を成とかや。されは越の臣下にて。政事を身に任せ。功名とみ貴く。心のとく成へきを。功成名遂て身退くは。天の道と心ゑて。小船に棹さして五湖の遠島を樂しむかゝるためしも有明の。月の都をふりすて〳〵西海の波濤に趣き浮身の科の無よしを。やはあけき給はゝ頼朝も。終には靡く青柳の。枝を連ぬる浮ちきり。なとかは朽し果へき「たゝ頼め」「唯頼め。しめちか原の。さしもくさ「我世の中に。あらん限りは「かく尊詠の偽りなくは。かく尊詠の偽りなくは。頓て浮代に出舟の船子の早ともつあをとくふと。はや纜をとく〳〵と。すゝめ申せは判官も。旅の宿りを出給へは「靜はなく〳〵ゑはし直垂ぬき捨てあみたにむせく浮別。見るめも哀れなりけり〳〵

同切

上字方「悪逆無道の其つもり。神明佛陀の冥慮に背き。天命にしつみし平家の一類主上を始奉り一門の月卿雲霞のとく。波に浮ひて見ゝたるうや「抑これは。桓武天皇九代の後胤。平の知盛幽靈なり。荒珍しやいかに義經。思ひもよらぬ浦浪の「壁をしるへに出舟の。〳〵「知盛か沈みし其有樣に「又よし經をも海に沈んと。夕波に浮へる長刀取直しとも名浪の紋あたりを拂ひ。うしはをけたて惡風を吹かけまなともくらみ。心もみたれて。前後をはうする斗なり「其時義經すこしも騒かす〳〵打物扳もちうつゝの人に。向ふか如く。言葉をかはし戰ひ給へは。辨慶かし隔て打物わさにてかなふましと。珠數さら〳〵とおしもんて。東方隆三世南方軍吒利夜叉。西方大威德。北方金剛夜叉明王中央大聖不動明王のさつくにかけて。祈りいのられ惡靈次第に遠さかれは。辨慶舟子にちからをあはせ。浮船をこきのけみきはによすれは。猶怨靈はしたひ來るを追はらひいのゑのけ又引汐にゆられ流れ。またひく汐にゆられなかれて。跡しら波とろ成にける

大蛇

「然るに此乙女は是我子也。名をは奇稲田姫とヤすり。簸の川上の大蛇に呑れ。先に我子八人の乙女有。年毎に加様に歎く其故は。同上

簸の川上の大蛇に呑れ。今又此姫どられんとす。免るゝによしなしといふ。「其時素盞烏詔りして宣はく。實理りや老人の歎く心を憐みの。恵ろ深き川上の大蛇を退へ治る國となすへし。小女を我にたひ給へと。宣へは老人は喜悦の色をなし給ふ。「すゝはち乙女を奉る。同聽て尊は稲田姫の。湯津の爪櫛とりなして。髮つらにさし給ふ。其儘治る國津神。爰に宮居の二柱。たつや八雲の妻共に。八重垣造る言の葉の。三十字一文字の詠歌の始成へし。上同

實有難き詔り。〳〵。偖や大蛇を從へん其儀方便いかからん。「畜類の心も兼て白まゆみ八しはりの酒を取舍せ。さすき山をいゝおき酒船に酒を湛へん。上同

扨や八艘の酒舟を。簸の川かみに浮へつゝ。「乙女のすかた移さんと。同夕部の雲の浪煙りも立や簸の川上に。稲田姫を伴ひあからせ給ふ有かたや〳〵。同上

一セイ光りちる。玉の儀興を先立て。みをは馬上に威儀をなし。簸の川上にと。急きけり。「扨是は。伊

弉諾伊弉冉の儀子。ろさのをの神なり。簸の川上の大蛇をしたかへ國土ゆたかにおすへきなり。上同八雲立出雲八重垣妻ともに。〳〵。烏上の嵩に打あかり。簸の川上は是なれや。山ろひへ岸高く。嵐も波も聲々に。もの冷しき川岸に。稲田姫を。一人すへ奉り。波間に浮へる酒船に。儀影を移し玉へは。尊は馬より下り立て。岸に上つてひろかに出る大蛇を待居たり。上同

打上川風暗く水うつまき。〳〵。雲は地に落浪立あかり。山河も崩れ鳴動して。顕はれ出る大蛇の勢ひ年ふる角にはくも霧かゝり。松柏ろひらに生臥て。眼はさあかゝらあかゝちの。光りを放ち角を振たてさも恐ろしき。勢ひなれ共さすか心は畜類の。舟にうつろふ影を呑んと頭を舟に落し入て酔ふしたるこそ怖ろしけれ。下上「尊八十握の神劔を扱持。同〳〵遙の岸より下り給へは。大蛇は驚き怒りをなせ共毒酒に酔伏通力うせて山河に身を投漂ひ廻るを神劔を振上切給へは。きられて其尾は雲をうかち。尊を巻んと猛へは飛違ひ。巻付は切拂ひめくれは廻る樂のいきはひ。神は威光の力を顕はし大蛇を。斬ふせ忽ちに其尾

に有し飯を取て。村雲の飯とは名付たり

舍利

「然るに後五百歳の佛法。既に末世の折をにて。西天唐土日域に。時至つて久堅の。月の都のやまおみに佛法流布のしるしとて佛骨をおさめ奉る「寶目前の妙光の影。此ほ舍利に。しくはなし然るに。佛法東漸とて。三如來四菩薩も皆日域に地をしめて。衆生を濟渡したまへり。常在靈山の秋のころ。わつかに二月に望んで。魂をけし。泡沫双樹の昔の庭いせきをきいて。腸をたつ。有難や佛舍利の。ほ寺ろ在世なりける。寶や鷲の太山も。在世の砌に。ところ草木も法の色をみせ。皆佛身を得たりしに「今は淋しくすさまし。月はかり社むかしおも。こさんの松の間には。よろ〳〵白毫の秋の月を禮すとかや。蒼海の波の上に。縱に四諦の。曉の雲をひく空の。さびしさろお鷲の太山。ろれはらへ見ぬかたろかし。爰はまさに目前の。佛舍利を拜する。寺ろ貴かりける「不思議やな賜たる空俄にかき曇り。堂前に輝く稲ひかり。こはろもいか成事やらん

「今は何をかつゝむへき。其古への疾鬼か執心。猶此舍利に望有。ゆるし給へやほ僧達「こはろも見れは恐ろしや。面色替り鬼となつて「舍利殿に望み昔のをく「きん〳〵はんを見せ「寶座をなして「栴檀ちむすいかう。〳〵の。うへに立のほる雲煙をなして稲妻の。光りに飛紛れて。もとより足疾鬼とは。あしはやき鬼なれは。舍利殿に飛あかりくるくる〳〵と。見る人の目をくらめて。其紛れに牙舍別をとつて。天井を蹴破り虛空に飛てあかる見よしか行衛もしらすうせにけり〳〵「抑是は。この寺を守護し奉る。韋駄天とは我事なり。爰に足疾鬼といふ外道。在世の昔の執心殘つて。又此舍利にとつてゆく。何く迄かはのかすへき。其牙舍利。おいてゆけ「いや叶ふましとよ此佛舍利は。誰も望みの。有物を。欲界色界無色界。化天や。他天在化自在天。三十三天よち登りて。帝釋天迄。追上れは。梵王天より出會給ひて。もとの下界に追下す。もとの下界にかつくたす「左へゆくも右へ行も。前後も天地も塞りて。疾鬼は虛空に

くる〳〵くると。うすまひ廻るを韋駄天立寄はうはうにて。疾鬼を天地に打ふせて。首を踏へて牙舎利はいかに。出せやいたると責られて。なく〳〵舎利を指出せは。韋駄天舎利を取給へは。さはかり今迄は足はやき鬼の。いつしか今は足よわ車のちからもつきこゝろも花々とおきあかりてこゝろさにけれ

鐘馗

上シテ「草虫露に聲しをれ。同か〳〵尋ぬるにかたちなく。老松既に風絶てとへとも松は答へす。實や何事も思ひたえなん色も香も。終にはろはぬ花紅葉いつをいつとか定めんいつをかいつとさためむ一生は風の前の雲。夢の間に散しやすく三界は水の上の泡光りの前に消んとす。綺綺殿のうちには有爲の悲しみをつけ。翡翠の帳の中には有漏の願力有とかや。槃花は。これ春の花。きのふは盛なれ共。けうは衰ふ鬼力の。秋の光り。朝に増し。ゆふへに減すとかや。春去秋來つて。花散し葉おつ時。うつり衆色變して。樂み既にさつて悲しみ早く來るり。上シテ「朝顔の花の上なる露よりも。同はかなき物は蜻蛉の。有かなきかのこゝちして。世を秋風の打靡。群ゐる田鶴のねを鳴て。四手の田長の一聲も。たかよみちをか知すらん。衰れ。おりける人界をいつかはあれはつへき。「是はふしきの沙事かな。急き帝都に趣きつゝ奏く奏聞申へし。暫く待せ給へとよ。「迎見ゝゐを夢れ中。誠の姿を顯はさんと。上同云より早く景色かはりて。上同傳へ聞く佛在世の。〳〵。淨藏淨眼のことくに。其高さ七多羅樹。虛空にあかりては座をしめ。地に入ては火焔を放ちて。水をふむ事陸地のことくに。さらに〳〵とはしりさつて。かたちはさゝかから山彦のかたちはさなから山彦の。聲はかり去て失にけり〳〵。「苦の楚に法をのへ。〳〵。さも冷しき山陰の。あらしと共に聲立て。此妙經を讀誦する〳〵。浮シテ上「鬼神に横道なしといふに。何ろ猥にさわかしく。汝しらすや我こゝろ。國土を守る誓ひあり。上地寶劍光り冷しく。日月影かろかに。松嵐こすゑを拂ふかの如く。惡鬼の亂れ思れ去て。實も鐘馗の精靈なり。上ロンキ地打上ヤ有難の沙事や。うも君道を守らんの。其誓願の御誓ひいか成謂

なるらん。上「鐘馗及弟のやつ。鐘馗及弟のみきむにて。我と亡せし悪心をひるかへす一念發起菩提心あるへし」上地「寶まとあるちかひとて。國土をしつめわきて寶上「禁裏雲井の樓閣の」上地「爰やかしこに遍滿さ上「おるおは玉殿」地「廊下のしたに下浮はしのもと迄も。〳〵。劍をひろめてしのひ忍ひに。もとひれは。衆のことく。鬼神は通力うせ。顯はれ出れは。忽にやつた〳〵にきりはおさて。まのあたりなる其いきはひたゝ。此つるきの威光となつて。天にかゝやき地にあまねく。治る國土とおる事おさまる國土とおる事も。寶有難き誓ひかお〳〵

松山鏡

「是を水といはんとすれは。即漢女か粉をろふるかゝみ清瑩たり。上同花といはむとすれは。蜀人交をあらふにしき。我とても娑婆の故郷に立歸らは錦の袴君かた下「むかしを語り申へし。同夢驚かし。給ふなよめ「唐土にちんしとて。賢女の聞え有けるか。世の習ひ思はすも夫遠行の子細あり。是や限りと思ひけん。形見の鏡破て猶。光りろ殘る三日月の。よひにまち

明て恨み。文もたえぬしも來す。憂年月を故郷の。軒端の荻の秋更て。風の便りの傳聞は。おつとは其國の主となりあらぬ妹背の川浪の。立歸るへきやうもおし。扨はあふ事も。かたみの鏡我ひとり。涙おかから影見れは。半月の山のはに。うちかたふいてなくならてせん方もなき折節に上「いつくより共しらさりし。同かさゝきひとつ飛來り。ちんじか肩に羽を休め。飛廻り飛さかり。まふよと見しかふしきやな有し。餓のわれとおり。本の如くに成にけり。滿月の山を出壁天の照す如くおり。是や賢女の名を見かくかゝみ成へし。上「いかに罪人何とて遲きそ。片時の暇と云つるに。中冥官いかりをおし給へは。倶生神急き苦思を見せよとの仰を蒙り。瞋恚のもえたつ熱鉄のしもつをふり上て上同空蟬の〳〵。やつからは娑婆にやとまる。覽。魂は冥途に脱の衣の。はりの鏡の。いさきよき面前にひつさけ引むけあれみよ娑婆にての罪科よ下「打上「こは如何にふしきやな。同〳〵孝子のとふらふ功力によつて。鏡の影をよ〳〵見れは。かうへにきよくさ。扇は金色両臂をかゝ見て手を合すれは。さおか

ら菩薩の座像かとみうらに花ふり虚空に音楽。きかす見もせぬ冥途のきとくすはや地獄に歸るうとて。大地をかつはとふみならし。大地をかつはと踏破つて。おらくの底にろ入にける

小鍛冶

「其後玄宗皇帝の。鐘馗大臣も。剣の德に魂魄は。君邊に仕え奉り魍魎鬼神に至る迄。釼の刄の光りに恐をて。其冠をなす事をなす」「漢家本朝に於てつるきの威德申に及はぬ。奇特とかや」「又我朝の其はしめ。仁王十二代。景行天皇。詔の御名をは日本武とヤしか。東夷を退治の勅をうけ。關のひかしも逢ふる。東の旅の道すがら。伊勢や尾張のみつらにたつ波迄も歸る事よと羨みいつか我等も歸る浪のとろも手にあらましと。思ひつゝけて行程に「爰やかしこの戰ひに人馬うむくつに身を碎き。血は涿鹿の川と成て。紅波楷流し數度に及へる夷も甲を脱て戈をふせ。皆降參に申けり。尊の御宇より御狩場を進め給へり。比は神無月。廿日餘りの事なれは。四方の紅葉も冬枯の。遠山に見ゆる初雪を詠めさせ給ひしに。「夷四方をかこみつゝ。枯野の草に火をかけ。餘煙しきりにもゑ來り敵せめつゝみを打かけて。火焔を放ちてかゝりけれは。尊つるきを拔て。あたりを拂ひ忽ちに。はのはもたち退けと。四方の草を薙はらへは。つるきの精靈あらしと成て。焔も草もふきかへされて。天に暉き地にみちくて。猛火は却て敵をやけは。數万騎のゑひすともは忽ち爰にて失てけり。其後四海治りて人家戸さしを忘れしも。其草薙の故とかや。唯今。汝かうつへき其瑞相の御剣も。いかて夫には劣るへき。傳ふる家の宗近よ。心易くも思ひて下向し給へ」

阿漢家本朝に於てつるきの威德。時にとつての祝言ヤはかなく候。偖御身はいかなる人ろ「よし誰とても頼むへし。先々勅の御釼を。打へき壇をかさりつゝ其時我を待給はゝ。通力の身を變し〳〵て。かおらす。其時節に參り會て御ちからを。付ヤへし待給へと。夕雲の稲荷山。行衛もしらす失にけり〳〵」「宗近勅に隨つて。則壇に上り。不淨をへたつる七重の注連。四方に本尊を掛奉り。幣帛を捧。仰き

願はくは。人皇六十六代。一條の。院の御宇に。ろの職の。褒れを襲る事。是私の力に非ず。伊勢諸いさなみの尊。天のうき橋を踏渡り。豊あし原をさくり給ひし御鉾より始れり。其後なんせむろうかたこくはつし。みた尊者より以來。あま國ふしとの子孫に傳へて今に至れり。下かん　ねかはくは。同　宗近私の高名にあらず。普天卒土の勅命によれりさあらは十方恒沙の諸神。只今の宗近に力を合せてたび給へとて。幣帛を捧げつゝ。天に仰き頭をかたふけ。骨髓の臚情聞いれ納受せしめ給へや　下ワキ　「謹上再拜打上

いかにや宗近　勅のつるぎ引〜。打へき時節は虛空にしきり願めやたのめ。只たのめ打上ヤ童男塚の上にあかり。同〜。宗近に參拜の膝をくつし。扨御劍のかねはと問は。宗近も恐悅の心を先としていかね取出し。敬の槌をはつたとうてはちやうとう上同つちやう〜とうち重ねたる槌の響き天地に聞えておひたゝしや打上かくて御劍を打奉り。面に小鍛冶宗近と打　「神躰時の弟子なれは。小狐とうらにあさやかに　上同　打たてゆすみつるきの。及は雲を凱したれは

天の村雲とも是なれや　下シテ　天下第一の。同〜。二つ銘の御劍にて。四海を治め給へは　上　五穀成就も此時あれや。すゑはち汝か氏の神。稻荷の明神小狐丸を。勅使に捧け申。是迄なりといひ捨て。又むら雲に飛のりまた村雲に。とひ乘て。おかし山いおりのみねに。歸りける

岩船

「神も守りの道すゝに　上同　爰に御幸を住吉の。神と君とはゆき合の。まのあたりあらたなる君の光りそめてたき　上ロンギ地　「千世迄ときくうる市の數々に。〜。四方の門邊に人さわゝ。住吉の濱の市たからの數をかふとかや　上シテ　「春の夜の一時を。千金をなすとても。たとへはあらし住吉の。松風あたひなき金銀珠玉いかはかり　上地　「千顆万顆の玉衣の。浦は津守の宮柱　下シテ　「たつ市やかた數々に　地　まかきもつゝくかたろきの　下シテ　「みとしろにしきあやとろも　上地　「頃も秋たつ夕月の。影に向ふや淡路潟　地　「陰島か磯はあゝめにて　地　「松のひま行捨小舟　シテ　「よるか　地　「出るや　シテ　「住よしの。同　「岸うつ浪はは　上地　うたり松吹風もさつ〜として。さゝめことかくやら

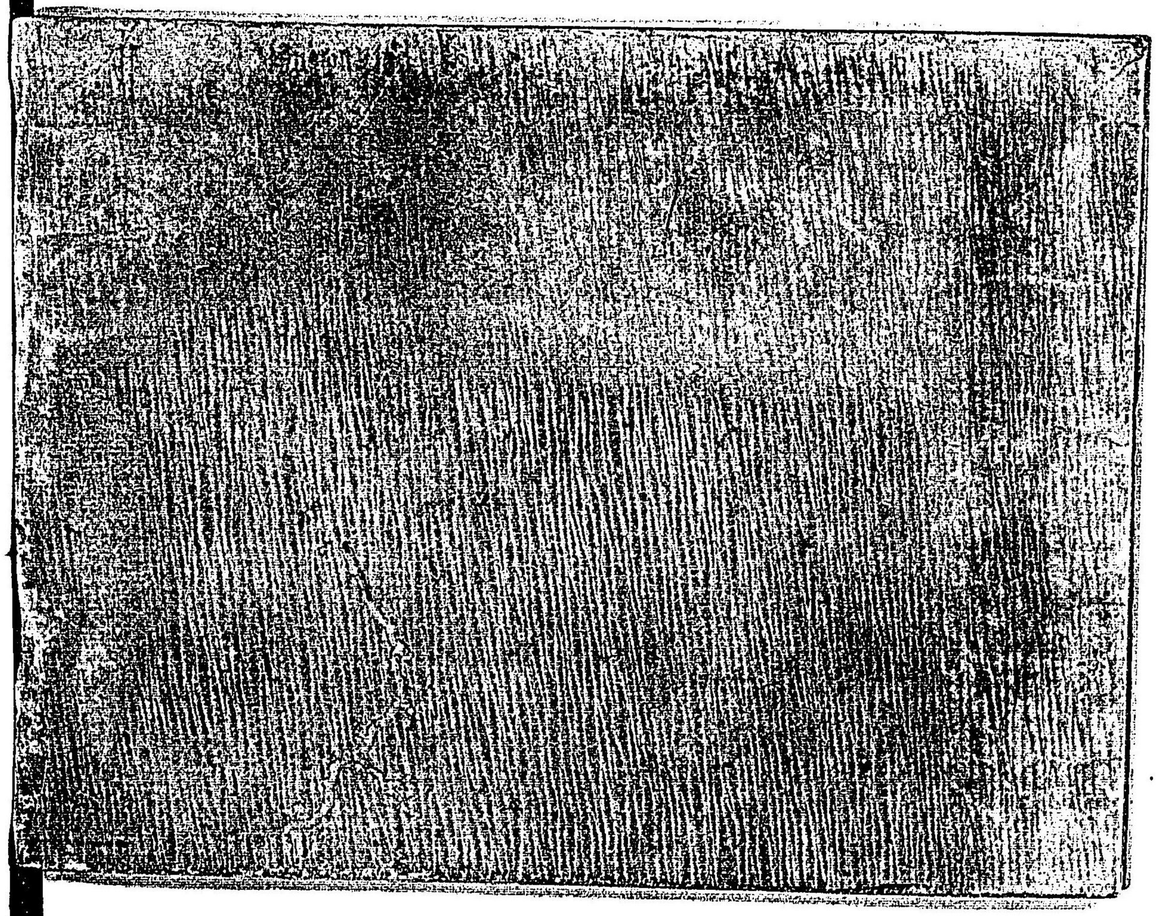
ん。其四の渚の音をとめしんしやうの江と申ども。是にはよもまさし面しろの浦の景色や「又岩舟のより來りし（ワキ）「ろも岩舟の寄くるとは。浮身は如何成人やらん「寶旅人はよもしらし。天も納受喜見城の。寶を君に捧げ申さんと。天の岩船雲の波に高麗唐土の寶のおふねを。只今爰によすへきなり（上同）今は何をかつゝむへき。其岩船をこきよせし天のさゝめは我ろかし。飛かける天の岩舟たゝへてろ。秋津島根は宮柱住吉の松の緣りの空の。あらしと共に失にけり（上地）「久堅の。天のさゝめか岸舟をとめし神代の。幾久し（引浮シテ上）「我は又下界にすんで。神を敬ひ君を守る。秋津島根の。龍神なり（引上地）打上「或は神代のかれいをうつし「又は治る浮代に出て「寶の浮舟を守護し奉り勅もおもしや〳〵此岩舟（上地）打上「寶をよする波の皺。柏子をろろへていやゑいさらゑいさ（上）「ひけや岩舟（地）「天のさゝめか波のこし包み（同）「ていとうの柏子を打なりやさゝら浮ゐめくり廻りて住吉の松のかけ吹よせよゑいさ。ゑいさらゑいさとおすやかゝろの〳〵うしはのみちくる浪にのつて。八大龍王は海上に飛行し浮舟のつゝを手を手にくりからまき。盃にひかれ波に乘て。おか居も先てたき住吉の岸に寶の浮舟をつけおさめ。數も數万のさゝけもの。はこひ出すや心の如く。金銀珠玉は降みちて。山のとくに津守の浦の君を守りの神は千世までさかふる浮代とろおりにける

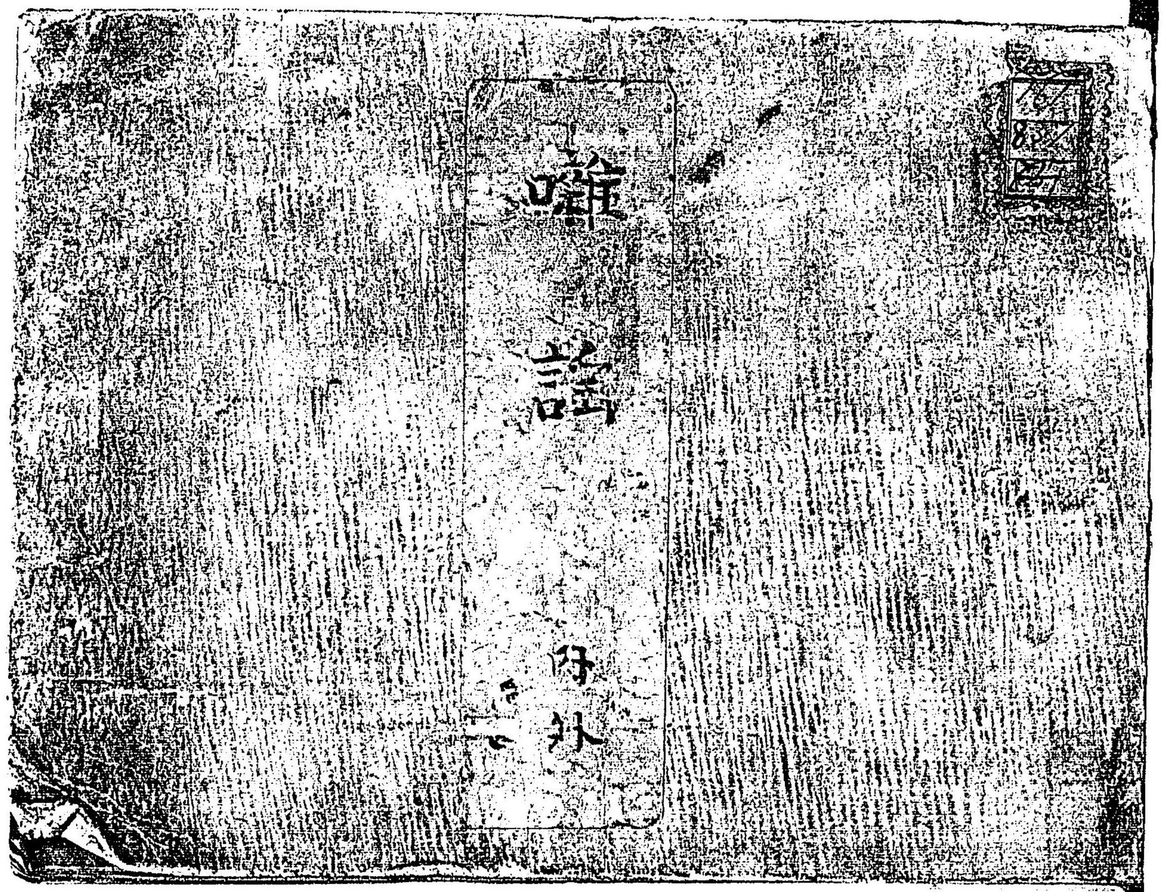
金札

（上シテ）「是は伊勢天神宮の浮つかはしめ天津太魂の神なり（引開）猶しも我を拜まんと思はゝ。重て宮居を作り崇むへしと（上同）迦陵頻伽の聲はかり虛空に殘り。雲と成雨と成やいかつちの光のうちに入にけり〳〵（上同）樂にひかりてとゝまろう。帶の袖ころ。綾くおれ（引浮シテ上）守るへし。わか國なれはすへらきの。萬代いつと。限らまし（引上地）打上かきらしな〳〵。榮行浮代を守とのしるも（上シテ）「唯ふもくせよ。神ときみ（引上同）打上重くすへしや〳〵扉も金のみふたの神躰光りもあらたに見え給ふ（上同）打上四海を治めし浮姿。（引）〳〵（シテ）「あらたに見よや君守る（上地）八百やろつ代の去るしなれや。惡魔降ふくの眞如の月弓扱又ゆきにはさはへなす。荒ふる

神もはらへのひもろぎ其神詫は數々に。左も右も神力の。惡魔を討はらひ清めをあすも金胎両部の。かたちなり（下シテ打上）迎かさまる國おれは。（下同）〳〵。中々になをや。君は船。臣は水穂の國も豊のに治る代をれば東夷西戎。南蠻北狄の恐れなけをは弓をはつし劔を納め。君もすおはに民を守りのみふたは宮に。治まりたまへは影さしおろす玉簾。おけさしおろす玉すたれは。ゆるかぬ御代とろ成にける（大尾）

文化七年正月出版
明治廿六年十月十日飜刻印刷。（定價五十錢）
仝　年仝月十七日發行
元版人　寶生大夫
飜刻發行者　磯部太郎兵衛　麹町區麹町四丁目十三番地
仝　野村銀次郎　日本橋區通三丁目拾番地
印刷者　大塲沃美　神田區柳原河岸第拾一號地
印刷所　龍雲堂　神田區柳原河岸第拾一號地





075050-000-1

特28-655

囃謠

磯部 太郎兵衛

野村 銀次郎／刊

M26

CEL-1000